

展示解説集

モダン  
中之島

大阪大学総合学術博物館 第16回特別展

“大大阪”時代の文化  
芸術発信センター

コレクション

会期 2022年4月28日(土)～7月30日(土)

会場 大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館

## ごあいさつ

大阪大学総合学術博物館第16回特別展「モダン中之島コレクション“大大阪”時代の文化芸術発信センター」にお越しいただき誠にありがとうございます。

大阪・中之島は、江戸時代には蔵屋敷が並び、近代には大阪市庁舎をはじめ、新聞社、図書館、ホール、ホテルが集積したシビックセンター (Civic Center) として発展しました。また、現在「大阪大学中之島センター」が立つ土地は、大阪大学医学部の前身・大阪医学校があり、本校の歴史を語る上で欠かせない重要な場所でもあります。

戦後も、フェスティバルホールや具体美術協会の「グタイピナコテカ」の開館など、大阪の文化芸術の中心地であり、いまでも重要文化財に指定されている大阪市中央公会堂や大江橋・淀屋橋を中心に、地域全体を美術館に見立てた“エコ・ミュージアム”として機能しています。

本年の大阪中之島美術館の開館は、この地域をさらに新しい文化ゾーンへと変貌させ、世界的にもユニークな“美術館島”としての性格を強めることになりましたが、大阪大学も、「大阪大学中之島センター」を改修して美学、美術史、演劇学、音楽学、文芸学など芸術系の拠点として「大阪大学中之島芸術センター」(仮称)の2023年開設の準備を進めています。

この動きを踏まえて本展では、大正14年(1925)東京市を抜いて日本最大、世界第六位となった“大大阪”時代を中心に中之島が文化芸術に果たした役割を、旧大阪市庁舎のステンドグラスほか、パンフレットや絵画、ポスター、写真、地図、刊行物など、日常生活や社会に氾濫した“イマジユリィ”(イメージ図像)を中心に再検証します。

最後になりましたが、開催に際しまして貴重な資料・作品をご出品いただきました関係諸機関・関係各位に心より御礼を申し上げます。

大阪大学総合学術博物館館長  
永田 靖

## 目次

### 第1章 大阪中之島大パノラマ—江戸・明治・大正から「大大阪」へ— 4

◇水都・大阪の今昔—江戸・明治の中之島

◇明治の中之島パノラマ写真

◇第5回内国勸業博覧会

◇二つのパノラマ地図

### 第2章 シビックセンター遊覧—モダンライフと都市施設— 8

◇大阪のシンボルにして文化拠点—大阪市中央公会堂

◇大阪市庁舎—堅牢広壯の白亜の庁舎

◇まぐさとメルクリウス

◇大大阪に一流迎賓館を—新大阪ホテル

◇中之島橋めぐり

◇難波橋のライオン像

◇立版古・制作のきっかけ

◇中之島にかかる橋

◇大阪朝日新聞社と中之島—朝日会館、朝日ビルディング

◇朝日新聞社社屋

◇朝日会館

◇朝日ビルディング

◇中之島公園—市民生活とモダンライフ

◇大阪遊覧—交通機関の整備と飲食店

◇観光艇「水都」

### 第3章 深化する“アートアイランド”—新しい文化芸術の発信拠点— 25

◇大阪市中央公会堂のコンペティション

◇中之島と大阪大学

◇大阪大学中之島センター大改修

◇グタイピナコテカ 1962-1970

◇中之島と文学

◇もう一つの公会堂プロジェクト—もしも他のコンペ案が実現していたら

#### <凡例>

- ・ 本書は、大阪大学総合学術博物館 第16回特別展「モダン中之島コレクション“大大阪”時代の文化芸術発信センター」(期間：2022年4月28日～7月30日)の展示解説をまとめたものである。
- ・ 本展覧会の解説は、飯田花織(大阪大学大学院人文学研究科 博士後期課程)、宇野茉莉花(大阪大学大学院文学研究科 博士前期課程)、加藤瑞穂(当館招へい准教授)、小松亜希子(大阪大学大学院文学研究科 博士前期課程)、辻野博文(当館准教授)、津村長利(アートで元気 代表)、永田靖(当館館長)、橋爪節也(当館教授)、波瀬山祥子(当館研究支援推進員)、花田珠可子(大阪大学文学部 研究生)、宮久保佳祐(当館 准教授)(五十音順)で分担し、解説の最後にカッコで文責名を明記した。
- ・ No. は作品リストに対応するが、解説集ではジャンルごとに分類したため順序が前後する箇所がある。
- ・ 展示資料のなかには今日からすると差別的・不適切な表現が含まれるものもあるが、当時の時代背景を考慮し、そのまま展示・表記することとした。

# 1章

# PANORAMA

## 大阪中之島 大パノラマ

### —江戸・明治・大正から「大大阪」へ—

大阪の街は、淀川水系に属する多くの砂州や島を開発整備することから発展した。船場をはじめ、島之内、堀江、堂島など水にちなむ地名も多い。現在も独立した島である“中之島”(大阪市北区)もまた、大阪の歴史と深く関係している。

江戸時代の中之島には、全国の諸藩が蔵屋敷を設けて年貢米や特産物が搬入集積され、対岸の堂島では米市場が活況を呈した。

近代になると蔵屋敷の跡地が活用され、官庁や銀行、郵便局、図書館、学校など公共施設が建ちならび、都市機能を集約したシビックセンター(公共機関の集まる中心街)としての性格を強めていく。

朝日新聞社も、江戸堀(現・大阪市西区)から中之島の旧・宇和島藩蔵屋敷に本社を移し、現在の大阪大学中之島センターも、大阪大学医学部があった広島藩蔵屋敷(本館常設に展示)の跡に建っている。

そして大正14年(1925)の第2次市域拡張で大阪市は、日本最大の都市“大大阪”となり、さらに中之島は、都市の美観を備えたモダンな空間へと変貌する。中之島公園や遊歩道が整備され、大阪市中心公会堂に加えて朝日会館などのホールや、最新設備を誇る新大阪ホテル(リーガロイヤルホテルの前身)が開業した。

この章では、幕末から近代へと変貌していく中之島の姿を、幕末の錦絵や「名所図会」などの挿絵や地図、写真をはじめ、“大大阪”成立直前に制作された「パノラマ地図」で紹介する。

# ◇水都・大阪の今昔

## 一江戸・明治の中之島

土砂の自然堆積で中之島が生まれたのは近世初期と考えられ、その後、整地が進んで17世紀半ばには、水上交通の利便性が高い立地を生かし、諸藩の蔵屋敷が建ち並ぶ地として繁栄した。米穀のほか各地の特産品が蔵屋敷に運ばれ、大坂（大阪）経済の重要な拠点として豪商も付近に集まった。天満青物市場・雑喉場魚市場と並んで大坂の三大市場に数えられた堂島米市場に、享保15年（1730）堂島米会所が設けられている。（飯田）

### 1. 「大阪名所図」

林景造制作・林金札堂発売元  
大正6年（1917）  
印刷、39.8 × 54.6、個人蔵

### 2. 「改正増補 國寶大阪全圖」

積典堂蔵版  
文化3年（1803）  
紙本、木版多色摺、100.0 × 68.5、個人蔵

### 3. 「なにわ十六橋智恵の渡」

板元・玉江亭  
年代不詳（弘化2年・1845頃か）  
紙本、木版墨摺、34.2 × 47.7 個人蔵

天神橋から中之島近辺の十六の橋を、それぞれ一度だけ渡って全部を回れるかという、脳トレ的な遊びを楽しめる摺物。数学者オイラーが解決した「ケーニヒスベルクの橋」と同じ問題であり、大坂の武田真元の和算書「真元算法」（1845年刊）にある「浪華二十八橋知恵渡」の舞台を中之島界限に変えたもの。板元の玉江亭は玉江橋にちなんだか。任意の橋からスタートし、同じ橋を二度渡らず初めの橋に戻ることができるか、皆様もぜひお試しを。（飯田）

【翻刻（／は改行を示す）】

なには 十六橋智恵の渡／此十六橋わたりハ／東西南北の橋詰合して／三十二ヶ所の間いづれの橋詰から／なりと／おのく／御さし／づの／所／よりわたり初／おなじ橋を二度／わたらずにもとの／わたりはじめの／橋詰へもどられ／るといふ此度の／しんはん／又此橋のわたり／よふ三十二通有／わきの町から／まはりても外の／橋

さへわたらずば／くるしからず／工夫をもつて／わたり／見給ふ／べし／江亭板

### 4. 「西国武家方御息女 大坂蔵屋敷着岸の図」

（鳥飼醉雅著『女藝文三才図会』より）

板元・吉文字屋市兵衛

明和8年（1771）

版本、大阪大学総合学術博物館蔵

封建道徳を説く女訓書。ここでは、蔵屋敷の門前に大船を迎える場面を描く。侍たちの表情も厳肅で、簾に顔が隠れ、侍女にかしづかれるのが藩の「御息女」だろう。著者の鳥飼醉雅は、本書を刊行した大坂の板元・吉文字屋市右衛門の筆名である。（飯田）

### 5. 「中之島の蔵屋敷（大坂の北中ノ島のほとり諸侯の蔵屋敷）」（『摂津名所図会』大坂部四上より）

秋里籬島著・竹原春朝斎ほか画

寛政8年（1796）

版本、個人蔵

### 6. 「蛸松」（『浪華の賑ひ』より）

暁鐘成著・松川半山画

安政2年（1855）

版本、個人蔵

### 7. 《中の嶋蛸の松》（《浪花百景》より）

長谷川貞信画

幕末～明治初年頃

紙本、木版多色摺、17.3 × 24.4、大阪大学総合学術博物館蔵

堂島川左岸にあたる中之島（現・大阪大学中之島センター付近）には、福島正則が植えたと言われ、蛸の足のように伸び伸びと枝を広げる松の巨木があった。大坂の浮世絵師長谷川貞信（1809～1879）の錦絵は、右上に「なには百景の内 / 中の嶋 / 蛸の松」と題し、「見るにさへ涼しき心地ぞせらる」として、水辺に枝を伸ばす「たこの松」の青々とした夏の姿を称える。左の白壁が広島藩蔵屋敷（現・大阪中之島美術館）で、中央は蔵屋敷に入る掘割りに架けられた舟入橋、左が田蓑橋である。松は明治時代に朽ちたが、それを惜しんで平成の護岸工事の際、対岸の堂島に記念植樹されている。（飯田）

### 8. 《梅石図》（《梅厓先生戯墨帖》より）

十時梅厓筆

享和3年(1803)

紙本墨画、個人蔵

十時梅厓(1749～1804)は大坂の儒者で、和歌を小沢蘆庵に師事した。本画帖(全10図)は享和3年の作と推定されるが、この年の蘆庵三回忌に梅厓ほか門人が大江橋(現在の市庁舎付近)の「寓舎」に集まったことを同門の上田秋成が「秋風篇」に記している。大江橋の南で描かれた本図も、同じ場所で描かれたのかも知れない。(橋爪)

#### 9. 《土佐堀川》(《大阪風景》より)(複製)

織田一磨画

原画：大正8年(1819)

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

大正8年(1919)頃の土佐堀川の風景だが、まだ蔵屋敷の景観が残っている。織田一磨(1882～1956)は東京出身の明治から昭和にかけて活躍した版画家。大阪市役所図案調製所や大阪帝国新聞社(現・大阪日日新聞)などに勤めた。(波瀬山)

### ◇明治の中之島パノラマ写真

中之島を360度のパノラマで写した写真帖(表6面、裏4面。表面は複写を壁面に展示)。撮影場所は、大阪市中央公会堂以前、明治35年(1902)に建てられた洋風木造の大阪市立公会堂の高層階と推定しておきたい。

足場を組んで建設中の建物は現・大阪府立中之島図書館で、『中之島誌』によると、住友家の寄付で明治33年(1900)建設に着手し、明治37年(1904)3月に開館した。工事現場の手前は豊国神社、隣接する塔は西南戦争の官軍戦死者を慰霊するために建てられた「明治紀年標」で、東面に「明治十五年季歳次壬午夏五月」の年紀があった。明治35年(1902)、紀年標は大阪城西側の偕行社の敷地に移されたとされるので、写真の景観は明治35年頃と考えられる(紀年標は昭和18年に解体され現存せず)。

写真には、明治42年(1909)の「北の大火災(天満焼け)」で焼失する大阪控訴院の、遠く向こうに、「北の九階」で知られた展望塔「凌雲閣」(北区茶屋町に顕彰碑)が写っていたり、大正4年(1915)、

市電を通すために新しく架橋された難波橋(ライオン橋)がなく、当時の中之島の東端である「山崎の鼻」に架かる古い難波橋(現在より一筋、西側に架かる)が写っているのが面白い。(橋爪)

#### 10. 中之島パノラマ写真帖

明治35年(1902)頃

写真、株式会社カワチ蔵

#### 11. 『郷土研究 上方』第117号(尊皇と先覚号)

上方郷土研究会編・創元社発行

昭和15年(1940)

印刷、個人蔵

#### 12. 「諸摺物調進処 壽榮堂」引き札

松川半山画・壽榮堂発行

19世紀後半(幕末か)

紙本、木版多色摺、個人蔵

大坂の浮世絵師で、『浪華の賑ひ』の挿絵を描いた松川半山(1818～1882)が手掛ける。引き札とは、宣伝のために作られる広告チラシのこと。壽榮堂は中之島渡辺橋南詰(中之島香雪美術館かフェスティバルホールの北側付近)に店を構えた摺物屋である。

#### 15. 「中の島公園招魂碑」(『寫眞画報 京阪近傍名所』より)

春陽堂発行

明治28年(1895)

印刷、個人蔵

#### 16. 松盛堂版「中ノ島公園地」(『万国名所図絵』下巻より)

青木恒三郎発行

明治19年(1886)

印刷、個人蔵

### ◇第5回内国勸業博覧会

西洋技術の紹介、国内産業の競争・発展を目的として、明治期に内国勸業博覧会が全5回開催された。そのうち、第5回内国勸業博覧会は、1903(明治36)年3月から7月にかけて、大阪・天王寺にて開催された。博覧会の跡地を利用・整備して開園したのが、現在の天王寺公園である。

本博覧会から海外企業からの出品が可能となり、13カ国の国々が参加したため、日本における最初の国際博覧会と言われている。

会場には、農業館、水産館、工業館、機械館、美術館といったパビリオンが立ち並び、第二会場として、堺に水族館も建てられた。本博覧会では夜間開場が行われ、会場中央にある噴水塔が照明でライトアップされるなど、パビリオンの閉館後はイルミネーションが会場を彩った。人気を博した施設として、大林組による地上45mの望遠楼「大林高塔」が挙げられる。エレベーター付きの高層建築で、のちに会場跡地に建設された「通天閣」のモデルのひとつとなった。これらイルミネーションや娯楽施設の集客効果もあり、来場者数は内国勧業博覧会始まって以来最大の530万人にのぼった。会場敷地は京都・岡崎で行われた第4回内国勧業博覧会の二倍余、会期も最長の153日間で、最後にして最大の内国勧業博覧会となった。(宇野)

### 13. 「浪花名産引札」

大阪市淀屋橋南詰・かぎや五兵衛発行  
明治36年(1903)頃  
紙本、木版墨摺、個人蔵

### 14. 『夜の大阪』

明治35年(1902)頃  
印刷、個人蔵

第5回内国勧業博覧会で初めて夜間開場が行われ、パビリオン閉館後も会場を彩ったイルミネーションについて本書は、「いかに眩くいかに綺麗なる、即ち点々星の如し五千の装飾燈」と描写する。他にも本書では夜の大阪の有名スポットが紹介され、中之島公園は人目を忍んでのデートスポットとして有名だった。(宇野)

### 17. 「第五回内国勧業博覧会必携 大阪全図及神戸」

清水吉康制作・田村定助発行  
明治35年(1902)  
印刷、53.6×77.0、個人蔵

## ◇二つのパノラマ地図

上空から街を描いた鳥瞰図では、第2次市域拡張で「大大阪」が誕生する前年大正13年(1924)の「大阪市パノラマ地図」が有名である。北を向いて船場、島之内などの都心や天保山を中心とする港湾が克明精細に描かれる。新淀川以北や城東など新しく編入される地域は含まれず、市域拡張前の大阪市の偉容を伝える。

英題(MOCK PAINTED PICTURE)は模擬絵図の意味だろう。明治5年(1872)に日下伊兵衛が創業した西区新町の地図専門の和楽路屋(日下わらぢ屋、2006年廃業)が発行した。先行して大正8年(1919)にも和楽路屋は「俯瞰式 大大阪案内図」を発行している。画面はモノクロで、街を北側から南を向いて描き、企業・商店などの書き込みが多い。英題に飛行機からの眺め(THE AEROPLANE VIEW)とあることと、「大大阪」の意味でも行政用語“GRATER OSAKA”ではなく、市民が好んだ“GREAT OSAKA”を用いることが興味深い。

数年の違いだが、二図の比較から、都市景観の微妙な変化がうかがえる。(橋爪)

### 18. 「俯瞰式大大阪案内図」

(THE AEROPLANE VIEW OF THE GREAT OSAKA)  
土山隆克制作・和楽路屋発行  
大正8年(1919)  
印刷、76.8×108.0、個人蔵

### 19. 「大阪市パノラマ地図」

(THE MOCK PAINTED PICTURE OF THE GREAT OSAKA)  
美濃部政次郎作・わらぢや発行  
大正13年(1924)  
印刷、74.0×108.0、個人蔵

# 2章 MODERN LIFE

## シビックセンター遊覧

### —モダン・ライフと都市施設—

近代の中之島には壮麗な建築が建ち並んだ。明治36年(1903)に日本銀行大阪支店、明治37年に大阪図書館(現・大阪府立中之島図書館)が建設され、大正7年(1918)には、ネオ・ルネッサンス様式を基調にセセッション様式も取り入れた大阪市中央公会堂が開館する。大正10年(1921)には大阪市庁舎が堂島から移転して竣工し、「近代復興式」とよばれる堂々たる姿を出現させた。また、落成記念に大阪市歌が制定された。

朝日新聞社が肥後橋に新社屋を建設したのが大正5年(1916)で、同社は、昭和元年(1926)に劇場や展示施設を備えた朝日会館を、昭和6年(1931)に、飛行機の航空標識塔を備え、スケートリンクや各種の専門店が入った朝日ビルディングを開館する。昭和10年(1935)には、海外の賓客にも備えた新大阪ホテル(現・リーガロイヤルホテル)が開業する。

また市民の憩いの場である中之島公園が整備され、震災の教訓から災害を意識しつつ、パリのシテ島などをモデルに橋梁の架けかえが進められる。昭和12年(1937)には都市の美観を意識して、土佐堀川河畔の逍遙道路が完成する。

近代の中之島はシビックセンターとして政治経済の中心を担っただけではなく、都市に住まう喜びを実感させる空間として市民生活に潤いを与え、大阪市民のプライドを支える場所となった。

## ◇大阪のシンボルにして文化拠点

### —大阪市中央公会堂

平成14年(2002)に国重要文化財に指定された大阪市中央公会堂は、ネオ・ルネッサンス様式の建造物で、大小のホールを備え、竣工から現在に至るまで演奏会や講演会等が催され、文化芸術の拠点として歴史を刻んでいる。

公会堂は、設計コンペの一等入選者・岡田信一郎(1883～1932)の原案を元に、辰野金吾(1854～1919)、片岡安(1876～1946)が実施設計を行って、大正2年(1913)に着工され、大正7年(1918)に完成した。窓の形や内装などセセッション(分離派)式のデザインが見られ、特別室の天井には、洋画家・松岡壽(1862～1944)の《天地開闢》が描かれた。

公会堂建設の原点は、米国視察の体験から近代都市には文化施設が必要なことを痛感した株式仲間・岩本栄之助(1877～1916)が、当時として莫大な金額100万円を市に寄付したことにある。株取引の損失で栄之助は自殺し、公会堂完成を見ずにこの世を去ったが、赤レンガの外観と瀟洒な内装を備えた美しい公会堂は、官を頼らない「民都大阪」のシンボルとなり、人々に愛され続けている。(飯田)

#### 20. 銀製皿・スプーン・フォーク

大正7年(1918)

銀製、大阪市蔵

#### 21. 利久(リキュール)グラス

大正7年(1918)

ガラス、直径5.0×高さ18.0、大阪市蔵

中央公会堂は開館当初、現在の集会室が食堂として使用されており、多くのパーティーが催されていた。これらの食器類は当時の食堂で用いられ、中央公会堂のオリジナルシンボルがあしらわれたデザインで統一されている。円の中にX状のラインと縦線が入ったこのシンボルは、上部が大阪市の市章であるみおつくしを表し、下部は公会堂の「公」を図案化したものとなっている。瀟洒

なデザインの銀製食器や切子文様が美しくきらめくグラスからは、華やかな祝宴が開かれた中央公会堂のかつての姿が窺える。(飯田)

#### 22. 中央公会堂 建築過程 写真アルバム

大正2～7年(1913～1918)

写真、大阪市蔵

大正2年(1913)に着工し、大正7年(1918)に完成した中央公会堂の建設過程がモノクロ写真に収められている。基礎工事の段階から装飾も整った完成時の姿まで約5年にわたる大規模な工事の過程を追った貴重な資料である。「木部彫刻作業 大正六年十一月十四日撮影」と記された頁には柱のパーツと職人達が写され、細かな箇所を手作業で仕上げる様子が見て取れる。床を造るにあたって人々が資材を運び、様々な道具を手にする姿が捉えられており、大型重機の無い時代に誕生した中央公会堂の壮麗さの陰に隠れた多くの人々の苦労が感じられる。(飯田)

#### 23. 「壮麗典雅・豊公大阪入城」報道写真

(写真特報大阪毎日)より)

大阪毎日新聞社

昭和10年(1935)10月4日

写真、44.0×29.5、個人蔵

#### 24. 「政友會の臨時全國大会開く」報道写真

(写真特報大阪毎日)より)

大阪毎日新聞社

昭和10年(1935)8月19日

写真、44.0×29.5、個人蔵

#### 25. 「山田耕筰氏帰朝記念演奏会」ポスター

大阪毎日新聞社主催

大阪市中央公会堂会場

昭和6年(1931)

印刷、52.5×38.0、個人蔵

中央公会堂では著名な音楽家の演奏会が多く催され、この山田耕筰帰朝記念コンサートは地元の企業である大阪毎日新聞社が当時一流の指揮者であった山田を大阪に招き、兵庫県宝塚を拠点とする宝塚交響楽協会との演奏を実現させたものであった。

山田耕筰(1886～1965)は日本の近代音楽の黎明期を支えた音楽家であり、指揮、作曲等広い分野で活躍した。

このコンサートで山田が指揮を務めた「かちどきと平和」(1912年)も彼によるもので、初めて日本人が作曲した交響曲とされている。オペラ「あやめ」のほか、日本初演となるロシア・アヴァンギャルドを代表するモソロフの「鉄工場(ポスターは「造鑄」)」が演奏された。(飯田)

## 26. 三浦環公演「オペラお蝶夫人」パンフレットと半券

同声会大阪支部主催

昭和12年(1937)

印刷、個人蔵

三浦環(1884～1946)は戦前に活躍した最も有名なソプラノ歌手の一人であり、東京音楽学校在学中には日本で最初のオペラ公演で主演を務めた。1914年に渡欧した後はお蝶夫人の好演によって彼女の名声はヨーロッパ中に広がり、約2000回にもわたってお蝶夫人を演じた。本公演のパンフレットと半券は三浦の帰国後に彼女の代名詞たるお蝶夫人を日本語訳にて中央公会堂で上演した際のもの。パンフレットはモダンなデザインながらも、夫である米国土官の帰りを待ち続けるお蝶夫人の後ろ姿が哀愁を伴って描かれる。(飯田)

## 27. 「東京音楽学校管弦合唱団大演奏会曲目」

大阪市教育会主催

大正10年(1921)

印刷、個人蔵

## 28. 「泰西名映画河合ダンス慈善大会」

大阪毎日新聞慈善団主催

印刷、個人蔵

## 29. 大阪市中央公会堂 保存・再生工事完成模型

平成14年(2002)

大阪市蔵

中央公会堂は、現在も同地にほぼそのままの姿を留めているが、平成11～15年(1999～2002)にかけて保存・再生工事が行われた。この時、建物の耐震性や利便性を高める目的で免震構造やエレベーターが導入されたほか、昭和期に改変された箇所を甦らせる工事も行われた。例えば正面玄関上方のアーチ部に設置されていた神像は戦時中の金属供給によって失われていたが、再生工事の一環として復元設置され、より開館当初の姿に近づいた。(飯田)

## ◇大阪市庁舎

### —堅牢広壯の白亜の庁舎

「世界の商工都市に相応した堅牢広壯の白亜庁舎」で、「土佐堀、堂島両川を挟む一偉観」(『中之島誌』)と讃えられた三代目大阪市庁舎は、大正10年(1921)に竣工した。

最初の市庁舎は、勅任府知事が市長を兼ねたことと、府庁のある西区江之子島にあったが、明治31年(1898)の初の市長選挙で大阪市は府から独立し、明治45年(1912)木造の二代目庁舎が北区堂島浜通に建てられた。

しかし、前年の明治44年(1911)に、中之島公園への新庁舎建設が市会で議決されており、設計案懸賞募集した結果、小川陽吉の案など三案をまとめ、片岡安により庁舎の実施設計が行われた。落成を記念して大阪市歌も制定されている。

大阪駅から都心に向かう動線上に位置し、塔楼がそびえて「近世復興式」と呼ばれた堂々たる建物は、日本銀行大阪支店と向かいあって“大大阪”時代の到来を実感させるものであった。三代目庁舎は昭和57年(1982)に閉庁・解体されたが、残されたステンドグラスや部材に偉容がしのばれる。(橋爪)

## ◇まぐさとメルクリウス

建物の出入口や窓の上部の横架材が楣(まぐさ)だが、大阪市庁舎の楣の中央には、翼のある二匹の蛇(竜?)がからまったたいまつが刻まれている。このマークは、ローマの商工神メルクリウスに由来すると思われる。

メルクリウス(ギリシャ神話のヘルメスと同化し、英名はマーキュリー)は、翼の生えた帽子と翼のあるサンダルを身につけ、二匹の蛇が巻きついた翼のある杖「カドゥケウス」を手にする。近代日本に商業神として伝わり、明治の「大阪経済雑誌」の表紙に描かれ、大阪市中央公会堂の屋根には、女神ミネルヴァとともに銅像が設置されている。

さらに大正 14 年(1925)の「大大阪記念博覧会」(大阪毎日新聞社主催)のポスターにも、翼のある帽子をかぶった人物が描かれ、楯に刻まれたようなたいまつをかかげている。市庁舎会議室に刻まれるなど、商工の都・大阪のシンボルとしてこの図様は親しまれたのだろう。(橋爪)

### 30. 旧大阪市庁舎 楯(まぐさ)

大正 10 年(1921)

木材、最大 54.0 × 153.0、大阪くらしの今昔館蔵

### 31. 旧大阪市庁舎 ステンドグラス 扇型

大正 10 年(1921)

ガラス、60.0 × 73.0、大阪くらしの今昔館

### 32. 「大阪市庁訪問の大阪工大生の示威行動」 (「ASAHI PHOTO NEWS」より)

大阪朝日新聞社

昭和 6 年(1931) 2 月 23 日

写真、40.5 × 25.0、個人蔵

昭和 4 年(1929)に官立の大阪工業大学が開校するが、昭和 6 年(1931)の大阪帝国大学設立(理学部と医学部)に合流しないことから、同年 2 月、学生が大阪帝国大学創設と同時に工学部とする旨の決議を採択し、同窓会理事会も同調した。同 2 月 21 日に在學生・同窓生有志が帝大編入を求めて挙行した街頭デモ取材したニュースだろう。結果、昭和 8 年(1933)に帝大に編入されている。(橋爪)

### 33. “TRAFFIC ORGANS IN OSAKA, TOMORROW” (明日の大阪の交通機関)

(PRESENT-DAY NIPPON より)

朝日新聞社発行

昭和 5 年(1930)

印刷、個人蔵

朝日新聞社が海外向けに発行した英語の宣伝グラフィック。ここでは、大阪市電気局長の平塚米次郎(右)と、高速鉄道建設部長の清水熙(左)が載り、昭和 8 年(1933)に開通した大阪市の地下鉄と、御堂筋線拡幅工事を宣伝する。(波瀬山)

### 34. 「大大阪」創刊号

大阪都市協会

大正 14 年(1925)

印刷、個人蔵

第 2 次市域拡張を記念して大正 14 年(1925)「大大阪記念博覧会」が大阪毎日新聞社主催で開催された。同社が市に寄付した博覧会の剰余金を基金に市民の自治意識の覚醒のため、大阪都市協会が設立され、都市問題研究誌「大大阪」が創刊された。表紙は市庁舎付近の写真である。(橋爪)

### 35. 『大阪市民と特別市制』

大阪特別市制期成同盟会

昭和 7 年(1932)

印刷、個人蔵

「特別市制」は大都市を府県の管轄からはずし、府県並みの権能を付与する自治制度で、イギリスでは 1888 年に特別市が生まれている。日本でも戦前に東京・大阪・名古屋・京都・神戸・横浜の 6 大都市が「特別市制」の運動を展開し、戦後も機運が盛り上がったが実現せず、昭和 31 年(1956)に異なる制度である「政令指定都市」が成立した。(橋爪)

### 36. 「ミス大阪」ビクター超特選楽譜第 49 篇

日本ビクター蓄音器株式会社

昭和 6 年(1931)

印刷、個人蔵

ビクターが刊行した楽譜で、作詩は菊池寛、作曲はジャズ篇を村越國保、三絃篇をビクター文芸部が担当した。表紙にはモダンガールの顔と大阪市庁舎の夜景が描かれている。(橋爪)

### 37. 「大阪市庁舎」写真葉書(

「大阪名所」シリーズより)印刷、個人蔵

### 38. 「祝大阪市役所竣成」

(『図案化せる実用文字』より)

藤原太一著・太燈閣

大正 14 年(1925)

印刷、個人蔵

新聞雑誌やパンフレットなどから文字をあつめたレタリングの図案集。「祝大阪市役所竣成」の文字は、大正 10 年(1921)の市庁舎竣工のときの看板か印刷物の文字を採用したのだろう。(橋爪)

### 39. 『空中征服』

賀川豊彦著・改造社  
大正 11 年（1922）  
印刷、個人蔵

キリスト教社会運動家として活躍した賀川豊彦（1888～1960）の『空中征服』は、突然、大阪市長になった賀川本人が、煤煙問題の対策で空中に浮かぶ都市を建設しようとする SF 小説である。市議会の証人に豊臣秀吉や大塩平八郎が登場し、皮肉の効いた挿絵も賀川が描いた。（橋爪）

#### 40. 檄文「大阪市民に檄す」

大正 5 年（1916）  
印刷、27.3 × 78.8、個人蔵

大阪市営電鉄第三期完成の祝賀行事への反対声明文。第三期線の全線開業が大正 5 年（1916）で池上四郎市長の時代である。公金四万三千元（大正時代の小学校教員の初任給が五十円程度）を使い、派手な装飾の花電車で芸妓を中之島会場へ運ぶという享樂的な催しを批判する。執筆者は、貴賓の歓迎や接待など必要な祝宴饗応があることを理解しながらも、当局者と少数の人士が公共の場で乱痴気騒ぎをするのは市民に悪影響と指摘し、祝宴饗応にかかる費用を市電従業員への賞給とすることや慈善事業へ使うことを提案する。（小松）

## ◇大大阪に一流迎賓館を

### —新大阪ホテル

現在のリーガロイヤルホテルの前身である新大阪ホテルは、西歐式のホテルを完備して海外からの賓客を迎え入れたいという政財界の強い要望の元、昭和 6 年（1931）に着工され、昭和 10 年（1935）に開業した。

当初は関東関西の設計家・建築家が連帯して計画が進められたが対立が生じ、大阪市臨時ホテル建設事務所が設けられ、京都帝国大学建築学科教授・武田五一（1872～1938）が深く計画に携わった。土佐堀川と堂島川に囲まれた中之島を、水都ヴェネチアに見立ててヴェネチアン・ゴシック様式のホテルを建設するというアイデアも、武田の発案である。

豪壮な建築のみならず、広々とした食堂や客室

サービスも海外の一流ホテルの基準を目指し、最新鋭のシステムを取り入れた西洋式ホテルとして運営された。賓客の目を楽しませるため、著名な洋画家の作品が集められた。本展出品の安井曾太郎《薔薇》も開業当時から高級宿泊室を飾った一つで、他に小出楯重、梅原龍三郎らの優品が現在もリーガロイヤルホテルに飾られている。（飯田）

#### 41. 新大阪ホテル模型

（新大阪ホテル労働組合結成 10 周年記念）

錫半本店製  
昭和 42 年（1967）  
錫製、BAR 瀧蔵

新大阪ホテル労働組合結成 10 周年を記念して制作された模型で、所蔵者の先代が新大阪ホテル内でバーを経営していたことから今に伝わる。「錫半」は、正徳 4 年（1714）に大坂心齋橋に開業し平成 8 年（1996）まで営業していた錫屋の老舗。（波瀬山）

#### 42. 「HOTEL NEW OSAKA BAR ROOM（酒場）」

謹賀新年 葉書  
新大阪ホテル発行  
昭和 36 年（1961）  
印刷、BAR 瀧蔵

#### 43. 「新大阪ホテル」写真葉書

印刷、個人蔵

#### 44. 「天神祭船渡御路線図」

里舟作  
昭和 12 年（1937）  
印刷、個人蔵

中之島の夏の風物詩である天神祭には新大阪ホテルも深く携わり、船が渡るルートを記した地図には新大阪ホテルが目立つ形で示されている。（飯田）

#### 45. 「天神祭の図」

（大阪毎日新聞社 第 17572 附録より）  
川口呉川画・京都便利堂印行  
昭和 7 年（1932）4 月 5 日  
写真、個人蔵

#### 46. 「水郷に躍動する古典美」報道写真（「寫眞特

報大阪毎日」より)

大阪毎日新聞社

昭和10年(1935)7月29日

写真、個人蔵

#### 47. 「HOTEL NEW OSAKA」パンフレット(カラー)

新大阪ホテル発行

印刷、個人蔵

#### 48. 「HOTEL NEW OSAKA」パンフレット(モノクロ)

新大阪ホテル発行

印刷、個人蔵

#### 49. 「クリスマスの催し御案内」パンフレット

新大阪ホテル発行

印刷、個人蔵

#### 50. 「新大阪ホテル 大阪市中之島」パンフレット

新大阪ホテル発行

印刷、個人蔵

海外の賓客を迎え入れるため開業した新大阪ホテルの英字案内。表紙には川沿いにそびえる新大阪ホテルの写真が印刷され、裏返すと神戸、京都、奈良といった関西の主要都市からの交通アクセスが図示されており、関西の観光及びビジネスの拠点としての大阪を強調する。更に、なかを開くと豊富な写真と共に室料や設備について説明されており、訪日客へ向けた大阪の歴史案内も付されている。このようなパンフレットはカラー版や各種イベントに合わせたものなど、様々なものが作成された。(飯田)

#### 51. PRESENT-DAY NIPPON

朝日新聞社発行 昭和9年(1934)

印刷、個人蔵

海外に日本を紹介する雑誌でも、新大阪ホテルは取り上げられている。小見出しには“A Magnificent Hotel in the Venice of Japan”とあり、ヴェネチアン・ゴシック様式の最新のホテルの姿は写真付きで発信された。(飯田)

#### 52. 「ホテル宝船」

水魚画

昭和10年(1935)

紙本、木版多色摺、25.5×37.3、個人蔵

心齋橋の近くで竹久夢二の版画を出版した書店・柳屋の三好米吉が、水魚に描かせ節分に開催される「浪速宝船乗合会」に出品した。ホテルのベッドを宝船に見立て、新大阪ホテルと島ノ内ホテルのスタンプを捺す。(飯田)

#### 53. 《薔薇》

安井曾太郎筆

昭和9年(1934)

カンヴァス、油彩、60.0×44.5、

株式会社ロイヤルホテル蔵

本作は新大阪ホテルが開業するにあたって建築技師の笹川慎一が収集した作品の1点である。当時の新大阪ホテルパンフレットではツインルームの枕元に本作が飾られていることが確認でき、現在はリーガロイヤルホテルのロイヤルスイートルームに掛けられている。

安井曾太郎(1888～1955)は京都出身の洋画家。浅井忠に洋画を学んだのち、渡仏してジャン・ポール・ロランに師事する。昭和初期には理知的ながらもデフォルメを効果的に用いた独自のリアリズム様式を確立した。本作では落ち着いた色合いの背景が主役である薔薇や花瓶の色彩を引き立てている。構図が類似した同題の作品がアーティゾン美術館に所蔵されており、テーブルと背景の境界を斜めに引く両作に共通した表現は安井の堅実な構成力を示すものと言えるだろう。(飯田)

### ◇中之島橋めぐり

「水都大阪」を象徴する中之島には数々の橋が架かっている。大正10年(1921)、第一次都市計画事業を開始した大阪市は、フランスのセーヌ川とノートルダム大聖堂があるシテ島をモデルに、都市風景の美しさ「都市美」の実現を目指すとともに、大正12年(1923)の関東大震災での橋の崩落も教訓に、耐震耐火の橋梁への架け替えによる街造りを進めていく。

この時期に中之島に架けられた橋には、上路式のアーチ橋が多い。橋桁の上に道路を設ける上路式は、橋梁内外の眺望を邪魔しないため、環境を重視する地域で積極的に採用されたと指摘される。橋のデザインや意匠は京都帝国大学教授の武田五一(1872～1938)らに依頼され、意匠が一

一つ異なるモダンな設計がなされた。武田は橋の頑丈さだけでなく美しさも追及し、その両立を目指したという。

中之島には近代建築が立ち並び、橋と相まってモダンな都市風景を作り上げている。災害対策を施し人々の安全を守るとともに、都市の美観を追求した場所と言えるだろう。(花田)

## ◇難波橋のライオン像

難波橋のライオン像は、兵庫県三田出身で、東京美術学校(現・東京藝術大学)で彫刻を学んだ天岡均一(1875～1924)による石像である。大正4年(1915)に新しい難波橋が架けられた時に制作され、口を開いた像と閉じた像の「阿吽」二体を一セットとして、橋の北詰・南詰に合計四体が設置されている。

当時の日本の公共空間には、西洋の広場を模して彫像が設置されることがあったが、彫像のモチーフは東洋的な題材から選ばれ、明治36年(1903)天王寺公園で開かれた第5回内国勸業博覧会でも、不動明王の宝剣を用いた噴水や白衣観音の噴水が設置されている。この内国博に天岡が出品した豊臣秀吉の騎馬像も、西洋の将軍騎馬像を意識し、直接は明治30年(1897)に皇居前に設置された楠木正成像に結びつくものであろう。

難波橋のライオン像も、1900年のパリ万国博覧会にあわせてセーヌ川に建設されたアレクサンドル三世橋にあるライオン像を意識したとされる一方、中之島にあった豊国神社への参道にあたることから、東洋的な狛犬に見立てたとも考えられる。(橋爪)

### 54. 「難波橋渡り初め」画稿

森琴石筆

大正4年(1915)

紙本、墨画、39.8×124.5、個人蔵

### 55. 「難波橋渡り初め 竹原夫妻像」画稿

森琴石筆

大正4年(1915)

紙本、墨画着色、各39.0×27.0、個人蔵

### 56. 「難波橋渡り初め 竹原夫妻像」写真葉書

大正4年(1915)

印刷、14.0×9.0、個人蔵

大正4年(1915)5月22日午前10時半より、橋の長寿を願い、難波橋で渡り初めが行われた。橋を歩いたのは熨斗目の袴、打ち掛け姿の二組の夫婦だった。そのうちの二組、橋の南詰から選ばれたのが竹原友三郎・とく子夫妻だった。森琴石は彼らの着物の色や文様まで細かく観察し、描き留めている。

翌日の新聞は、多くの人が見物に詰めかけ、渡り初めを行う一行の姿は「まるでご家老、奥方が歌舞伎劇の花道が、りをそのままの光景」だと伝えている。式の後には模擬店が出るなど夜まで大賑わいであったという。

森琴石(1843～1921)は大阪の南画家であり、明治17年(1884)に実業家の樋口三郎兵衛によって開校された浪華画学校で南画を教えていた。また、大正2年(1913)文部省美術展覧会の審査員に推薦され、関西西南画壇で活躍した。(花田)

### 57. 「大阪控訴院・大阪中央電信局」

(『大阪行幸記念 空中寫真帖』より)

朝日新聞社

昭和4年(1929)

印刷、個人蔵

### 58. 「川口端建蔵橋」

(『近代大阪近畿景観 第三編』より)

尾録之助著・創元社

昭和7年(1932)

印刷、個人蔵

### 59. 『大大阪現代風景』

阪毎日新聞社

昭和8年(1933)

印刷、個人

### 60. 「View of Great Osaka (大大阪の眺め)」

写真葉書

大正写真工芸所発行

昭和12年(1937)

印刷、個人蔵

近代都市には「都市美」が必要であるとして、大阪市が整備を進めてきた都市景観を集めた写真絵葉書セツ

ト。昭和12年(1937)、土佐堀川南岸に完成した遊歩道(逍遙道路)については、次の様に記している。

「大大阪市の面目を發揮するものの一つがこの写真に見る風景、つまり土佐堀河畔に装ひ美はしく整然と伸びた逍遙道路がこれで、明朗な近代色豊かなところである。」

そのほか大阪市庁舎や難波橋、堂島川可動堰(現・水晶橋)、土佐堀川が西横堀に分流する西国橋など、中之島界隈の風景が数多くとりあげられる。(橋爪)

#### 61. 「大阪錦画日々新聞紙」第28号

二代貞信画

明治8年(1875)頃

紙本、木版多色摺、24.5×17.5、個人蔵

東京で発行された錦絵新聞は大阪にも波及し、大阪に日刊紙が成立していなかった時期に普及していった。「大阪錦画日日新聞」は、「読売新聞」や「郵便報知新聞」などの記事を引用して製作され、明治8年(1875)5月から8月頃に発行されたと考えられている。

本号は明治8年に「いと」という娘が中之島の肥後橋から入水自殺し、彼女と親しかった娘「りう」も身投げをし、二人の亡骸が木津川の勘助島に流れ着いたという記事で、親の気持ちを考えると不孝の罪であると結ばれている。絵を描いた二代目長谷川貞信(1848～1940)は文章も担当している。(花田)

#### 62. 「難波橋」写真葉書

大正4年(1915)頃

印刷、個人蔵

#### 63. 「大阪風景を輯めて」写真葉書

大正写真工芸所発行

昭和初期

印刷、個人蔵

大阪の風景を集めた写真葉書で、道頓堀などに加え、難波橋や堂島川可動堰、中之島公園の風景が収められている。「躍進の大都」と銘打っているように、活気ある大阪の様子がうかがえる。また、葉書一枚一枚に説明文が付けられている。

この葉書を発行した「大正写真工芸所」は大正2年(1913)に和歌山で創業された会社で、優れた技術を用いて数多くの写真帳や絵葉書を製作していた。初めは和歌山市内の仕事を請け負っていたが、大正末から昭和にかけて成長を遂げ、日本全国だけでなく朝鮮や満州で絵葉書などを発行するまでになった。(花田)

#### 64. 「宝船(市電)」

三代・長谷川小信画

第5回 浪華宝船会発行

昭和8年(1933)

紙本、木版多色摺、26.0×32.2、個人蔵

切符コレクター・山本不二男の依頼で制作された。帆に難波橋のライオン彫刻が描かれ、工場の煙が「たから」と読める。車輪の波を進む船体は乗り換え切符である。(橋爪)

#### 65. 「難波橋」手ぬぐい

(「大阪名所御手拭」より)

三越製

布、プリント、92.0×34.0、個人蔵

### ◇立版古・制作のきっかけ

立版古(たてばんこ)は今でいうペーパークラフトのことである。

この立版古を作るきっかけは社会人対象の2017年度大阪大学総合博物館主催の大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座を受講し、橋爪節也教授の活動に参加したことから始まる。その時のお題が「橋」で、参加者はそれぞれ「橋」をテーマに冊子を作ることになった。

どんな内容にしようかと思案している時に、橋爪先生の研究室で見た長谷川小信作の鉄橋・心齋橋の立版古がとても良かったので自分も立版古を作ろうと思った。橋は現在も一部が残っている石造りの心齋橋にした。絵はがきとまだ橋の部分が残っているので簡単な?と思ったが、思いのほか難しく、制作には1ヶ月間ほどかかった。縮尺は水晶橋と同じ100分の1にしたが水晶橋のように階段はなく、長さは水晶橋の約半分ぐらいである。展開図はB5厚紙3枚で出来ており、冊子の差し込み付録にして配布した。(津村)

### ◇中之島にかかる橋

人が渡れない橋(水道管橋2本)を含め24本ある。石材が使われている橋は東から、

1. 難波橋（ふりがなは「なにわ」ではなく「なにには」である）、2. 水晶橋、3. 淀屋橋、4. 大江橋（ふりがなは「おおえ」ではなく「おほえ」である）、5. 錦橋、6. 堂島大橋

橋に立つ街灯は様々で、傾向として西へ行くほど数が減り、簡素化される。たもとに立つ街灯と中ほどに立つ街灯と形が違う場合もある。今回の街灯 10 分の 1 モデルは中ほどに立つものを中心としたが、水晶橋だけは錦橋の街灯と似ていることもあり、特徴があるたもとの街灯にした。（津村）

## 66. 水晶橋 100 分の 1 モデル立版古 （ペーパークラフト）

津村長利制作

令和 4 年（2022）

紙製、長さ 94.0、幅最大 16.5、高さ 11.0、個人蔵

昭和 4 年（1929）3 月 31 日に竣工したこの橋は堂島川可動堰と呼ばれ、川にたまったゴミを海に流す役割を担っていた。土佐堀川にかかる錦橋も同様の役割で造られた。水晶橋と呼ばれるのは昭和 57 年（1982）の改装工事が終わってからのようである。現在の形は南側（図書館側）の階段は短く、数段下りて左右に分かれて下りていく形になっているが、過去の画像を見ると左右同じ形をしており、展示品も同様に左右対称にした。その画像によると階段のアーチの下には川はなく、歩道だったようだ。また、現在は橋の上に植栽スペースなどがあるが、これは元々なかったので今回は作っていない。

たもとに立つ美しい街灯は基本四角形をずらしながら積み立てている。この四角の形状は他の橋の街灯にはあまりなく、他は八角形が多い。また他に比べて大きいことも含め、理由はわからない。橋は歩いているとわからないが、案外細長いものであると作ってみて感じた。

この 100 分の 1 モデルは A 4 厚紙 16 枚で出来ている。切り抜くだけでも時間がかかり、組立てには 8 時間ほどかかる。今後ネット等で販売予定ではあるが、少々大きいので難易度が格段と上がるが 150 分の 1 モデルの販売も考えている。（津村）

## 67. 水晶橋街灯 立版古（ペーパークラフト）

津村長利制作

令和 4 年（2022）

紙製、幅 20.0、高さ 31.5、個人蔵

100 分の 1 モデルでは小さすぎてよくわからないが、

明かりが灯る部分がかかなり複雑な形状をしている。全体像を見るには水晶橋付近で見えることは出来ず、大江橋に行き、ズームで撮影するしかない。今回も大江橋より撮影した画像から採寸した。この街灯の特徴は

1. 四角形を 45 度ずつずらしながら積み重ねている
2. 明かりが灯る部分が 2 段になっている

このような街灯はここにしかないことで、この橋が特別扱いであったことがわかる。淀屋橋&大江橋と水晶橋は特別な橋であった。もう一つ加えるなら難波橋も特別な存在であった。

その中で人しか渡れない橋は水晶橋だけで、大正 15 年に着手された公会堂、図書館と裁判所を結ぶこの橋は当時の大阪の象徴であったのかもしれない。そんな思いでゆっくりと見てもらいたい橋である。（津村）

## 68. 堂島大橋街灯 立版古（ペーパークラフト）

津村長利制作

令和 4 年（2022）

紙製、幅 6.0、高さ 22.0、個人蔵

国際会議場の前にある橋でたもと部分に石部分が残る。紹介した石材が使われている橋では西端にあり、少し離れている。本当はたもと部分に立つ街灯を立版古にしようと思ったが、上だけ見ると錦橋の街灯とよく似ているので、支柱が長い中ほどに立つ街灯にした。錦橋と同様に装飾がなく、立版古にするには作りやすい。たもとの石部分の形状は装飾的で一見の価値はあるので是非見に行つて欲しい。残念ながらこの橋より西側の橋の街灯は街中によくある街灯と同じ形状のもので、西の端ではその街灯も歩道側ではなく車道側を向いている。（津村）

## 69. 難波橋街灯 立版古（ペーパークラフト）

津村長利制作

令和 4 年（2022）

紙製、幅 9.0、高さ 25.0、個人蔵

たもとに立つライオン像はとても有名。このライオン像をよく見ると手彫りのため、少しずつ形が違う。例えば左右のライオンの前足の出し方も微妙に違って、見ているといろいろと発見がある。今回は街灯がテーマなので立版古にはしなかったが、いつか作ってみたいと思う。街灯の丸いガラスが特徴的でやや大きいものの周りに小さなものが 4 個囲む。そのガラス球を支える部分の装飾が美しい。この丸い形のもの中之島図書館にもあるので、是非見比べて欲しい。大きさなどは違うが、よく似ている点も多い。（津村）

## 70. 錦橋街灯 立版古（ペーパークラフト）

津村長利制作

令和4年（2022）

紙製、幅 8.0、高さ 19.0 個人蔵

水晶橋と同じ可動堰で水晶橋より小さく、測っていないが多分半分ぐらいの長さだと思われる。街灯はさほど装飾的ではなく、水晶橋に比べると簡素なイメージ。水晶橋の中程に立つ街灯と基本同じ形状をしているが、脚部分が短く、上に立っているアンテナのようなものが長く見えるため、アニメに出てくるキャラクターに見えて、とても可愛く思うのは私だけであろうか。しかし、橋の上にある植栽スペースの管理等が今ひとつで管理出来ないなら、邪魔だし撤去してもらいたいと思う、少しかわいそうな橋である。非常に良い立地にあるので、うまく使えば面白い場所になると思う。（津村）

## 71. 淀屋橋&大江橋街灯 立版古（ペーパークラフト）

津村長利制作

令和4年（2022）

紙製、幅 6.5、高さ 27.0、個人蔵

とても美しい街灯で、支柱も石で出来ているのはこれだけ。上から下まで装飾が施されており、特に上部は芸術的である。花のつぼみのようなものが並んでおり、八角錘の上にもつぼみがある。上から下まで八角形にこだわった形状で、水晶橋ほど高い場所ではないので、近づくときよく見える。長年立っているためか、あちらこちらが少し傾いているところもあるのでその辺りも見て欲しい。街灯ではないが、橋途中にあるバルコニーのような張り出した部分も美しく、水晶橋の次に立版古制作に挑戦してみたい橋である。（津村）

## 72. 『大大阪橋梁撰集』

江村恒一編・創生社発行 昭和4年（1929）

印刷、個人蔵

昭和4年（1929）に刊行され、橋の写真が一枚ずつ印刷されたカード形式の全3巻からなる写真集である。この形式は、それまでに発行されていた『建築写真類聚』や画集などに既に見られ、それらを参考にしたと思われる。ケースの蓋の裏面には、設計や建設に携わる専門家に向けた広告が掲載されている。大阪市第一次都市計画で数々の橋が造られる中で、特に優れた橋を収めた写真集だとされている。

中之島に架かる橋の中では、第1集には田蓑橋、堂島

大橋、第2集には渡辺橋、肥後橋、玉江橋、堂島川可動堰、第3集には銚流橋、大江橋が収められている。淀屋橋は昭和10年に竣工したため収録されていない。ちなみに大江橋と淀屋橋は平成20年（2008）に国の重要文化財に指定されている。（花田）

## ◇大阪朝日新聞社と中之島

### —朝日会館、朝日ビルディング

約130年にわたって“水都大阪”の象徴、中之島に拠点を構える朝日新聞社は、明治12年（1879）村山龍平を持主名義人として大阪市江戸堀で「朝日新聞」を創刊後、明治18年（1885）に中之島3丁目の宇和島藩蔵屋敷跡（現・中之島フェスティバルタワー・ウエストの位置）に移転する。明治22年（1889）には、前年の東京進出で「東京朝日新聞」が発行されたことで、大阪発行を「大阪朝日新聞」と改称した。

大正末から昭和初期、大阪朝日新聞社の周辺には、時計塔のある大阪朝日新聞社屋（1916年竣工）や、エジプト風の意匠による朝日会館（1926年竣工）、航空標識灯がある朝日ビルディング（1931年竣工）が建設され、文化の一大発信拠点へと成長する。

現在も、朝日新聞大阪本社や中之島フェスティバルホール、村山龍平収集の美術品を公開する中之島香雪美術館など、関連施設が集積し、世界へ情報発信する「大阪の顔」の役割を果たしている。（宇野）

## ◇朝日新聞社社屋

明治18年（1885）6月、朝日新聞社は中之島3丁目にあった旧宇和島藩の蔵屋敷を購入しそこに本拠を据えた。その後、大正5（1916）年に地上3階、地下1階の新社屋を竣工した。

大阪朝日新聞初の大型社屋で、幾何学的意匠の外観、大時計がある高さ40m近くの塔を特徴とする。当時の大阪を代表する建築物であり、中之島のランドマークとして愛された。

朝日新聞社は、関西建築の雄といわれた武田

五一を建築顧問とし、意匠設計を竹中工務店入社2年目の藤井厚二が担当した。また、朝日新聞社長・村山龍平の英断により、まだ実績の少なかった鉄骨鉄筋コンクリート造が採用された。

のちに藤井は武田の招きで京都帝国大学（現・京都大学）建築学科の創設期に講師となった。社屋は、昭和43年（1968）に新朝日新聞ビルに建て替えられた。（宇野）

## ◇朝日会館

市の発展には、中央公会堂のほかにも快適な舞台や展覧会場が必要であるとして、大正15年（1926）朝日新聞社は中之島に朝日会館を建設した。設計施工は竹中工務店。建物は地上6階・地下1階で、外壁を黒タイルで覆い、窓枠を金色タイルで縁取る意匠を施したものである。

1階に新聞発送場、2階に発送事務室とグラフィア製版場、3階に「展覧場」、4階から6階は天窓から外光が降り注ぐ1,500人収容の「公演場」という複合建築だった。

「公演場」の舞台の円柱はパピルスをかたどり、内装はヒエログリフやオシリス神などの神像レリーフが飾るエジプト式が採用された（新聞の「紙」の源流がパピルスであること、エジプトの最高神が太陽神「ラー」で、朝日に通じることに由来する）。

「公演場」では演劇や映画鑑賞会、ヤッシャ・ハイフェッツなど国際的音楽家のコンサートが開かれ、「展覧場」では、二科展や国画創作協会展、全関西洋画展、佐伯祐三遺作展が催された。

半世紀近く市民から愛されたが、昭和40年（1965）に閉館した。（宇野）

## ◇朝日ビルディング

船を連想させる外観を持つ朝日新聞社の社屋。石川純一郎設計で竹中工務店が建設し、昭和6（1931）年に完成した。地上10階・地下2階の高層建築である。外装に新素材であったアルミニ

ウムやステンレス、ジュラルミンなどの金属パネルや、曲面ガラスを用いた先進的なデザインは、建築界でも高く評価された。

テナントはオフィスだけではなく、1階に「ブレイガイド」、2階に「専門大店」と催し物会場があり、3階に鍋井克之、国枝金三らが指導する中之島洋画研究所、5階に美術新論社画廊があった。最上階では「レストラン・アラスカ」（現・中之島フェスティバルタワー）が営業し、屋上にアイススケート場と、夜間飛行のための航空標識灯（航空灯台）が設けられた。

誰もが憧れる都会のライフスタイルを発信し、再開発による建て替えまでの約80年間、前衛的でモダンなデザインは色褪せることなく強い存在感を示し続けた。（宇野）

### 73.「大阪朝日新聞社建築図面 時計台」

藤井厚二

1910年代

紙本、鉛筆、水彩、77.9 × 54.0、株式会社竹中工務店蔵

### 74.「大阪朝日新聞社建築図面 文字盤」

藤井厚二

1910年代

紙本、インク、鉛筆、水彩、37.6 × 60.8、株式会社竹中工務店蔵

大阪朝日新聞社の時計塔と文字盤の建築図面。時計塔は鉛筆や水彩で丁寧に描写されており、下部には細部の意匠のラフスケッチもある。文字盤は、英数字や漢数字でどのようなフォントを使用するのがよいか試行錯誤した跡が見て取れる。実際には、模型にあるようにローマ数字が採用された。

藤井厚二（1888～1938）は、広島県深安郡福山町（現・福山市）に生まれ、東京帝国大学を卒業後、大正2年（1913）株式会社竹中工務店に建築家として入社した。朝日新聞社の創設者である「村山龍平邸」（1917年）や「橋本汽船ビル」（1917年）の設計を担当した。（波瀬山）

### 75.「朝日新聞・朝日ビルディング・朝日会館」模型

株式会社山根工務店模型部製  
紙製、株式会社竹中工務店蔵

#### 76. 『朝日ビルディング 新築工事概要』

株式会社朝日ビルディング発行

昭和6年(1931)

印刷、個人蔵

モダンな朝日ビルディングの写真や図面を掲載し、仰角でとらえた外壁写真は当時流行のアングルを採用し、誌面レイアウトもドイツの美術学校「バウハウス」の新しい造形意識を反映する。建物には、大阪朝日新聞社の営業局や朝日会館事務局のほか、ビルを施行した竹中工務店のオフィス、中之島洋画研究所、美術新論画廊、レストラン「アラスカ」、「専門大店」もあり、屋上には航空標識灯とスケートリンクがあった。(宇野)

#### 77. 『時計』

横光利一著・佐野繁二郎装釘・創元社

昭和9年(1934)

印刷、個人蔵

アルミ板を布に縫い付けた表紙の装釘が、新感覚派の小説らしいモダンなデザインである。信濃橋研究所で小出檜重に学んだ佐野繁次郎(1900～87)が装釘し、大阪の創元社が刊行した。本書前年に出版された浪華写真倶楽部の小石清の写真集『初夏神経』も表紙が金属板だが、昭和6年(1931)竣工の朝日ビルディング外壁にも金属板が用いられており、その関連も指摘されている。(宇野)

#### 78. 「KAWATI-GATA」No.7 河内洋画材料店カタログ

河内洋画材料店発行

昭和6年(1931)

印刷、株式会社カワチ蔵

昭和6年(1931)竣工した朝日ビルディングに、信濃橋洋画研究所が移転して、中之島洋画研究所と改称するとともに、2階の「専門大店」に、河内洋画材料店(現・株式会社カワチ)の支店が開かれた。カタログ表紙のショーウィンドー写真には、移転改称記念の洋画研究所主催「鍋井克之 黒田重太郎 国枝金三氏作品展覧会」のポスターが貼り出されている。(橋爪)

#### 79. 「大阪市主要案内」地図

大阪朝日新聞社発行

大正15～昭和6年(1926～1931)

印刷、個人蔵

梅田から天王寺までを南北逆転で捉えた鳥瞰図。写真は大阪朝日新聞社の社屋と朝日会館で、朝日ビルディングがないため、大正15年(1926)から昭和6年(1931)の制作と考えられる。当時、大阪朝日新聞社は航空事業を展開し、城東に描かれた練兵場に社用機の格納庫を所有していた。(宇野)

#### 80. 「朝日新聞社 欧州訪問大飛行記念画報」

大阪朝日新聞社発行

大正14年(1925)

印刷、個人蔵

朝日新聞社の飛行機「初風」「東風」の二機がモスクワまで飛行したときの記念画報。(橋爪)

#### 81. 「大阪朝日新聞社新築概要」冊子

大阪朝日新聞社発行

大正5年(1916)

印刷、個人蔵

#### 82. 「大阪朝日新聞社案内」冊子

朝日新聞社発行

昭和11年(1936)

印刷、個人蔵

#### 83. 「朝日会館」パンフレット

大阪朝日新聞社発行

大正15年(1926)

印刷、個人蔵

#### 84. 「創立十五周年の朝日会館の事業」

大阪朝日新聞社発行

昭和16年(1941)

印刷、個人蔵

#### 85. 「プレイガイド」

昭和12年(1937)1月号/3月号

印刷、34.0×36.2、個人蔵

朝日ビルディング1階の大阪バス兼営「旅の平八社」の営業所に「プレイガイド」があった。朝日会館をはじめ、浪花座、文楽座、歌舞伎座、宝塚大劇場などの芝居、映画、コンサートの前売り券を販売する。季節ごとに絵柄が異なり、見ているだけでも楽しいデザインである。(宇野)

## 86. 「朝日ビルディング」テナント一覧チラシ

朝日ビルディング発行

昭和6年(1931)頃

印刷、26.7×38.4、個人蔵

## 87. 大阪朝日新聞社時計塔と飛行機

(「ASAHI PHOTO NEWS」より)

大阪朝日新聞社

昭和初期

写真、25.0×45.0、個人蔵

朝日新聞社の時計塔の上を複葉機(主翼が2枚の飛行機)が飛ぶ。「ASAHI PHOTO NEWS」は写真にタイトルシールを貼って掲示されたのだろう。(宇野)

## 88. 「神風号亜欧連絡飛行記念大懸賞ポスター」

大阪朝日新聞社

昭和12年(1937)か

印刷、個人蔵

昭和12年(1937)朝日新聞社は英国王室の戴冠式を祝う飛行計画を社告し、「神風」号による訪欧飛行を敢行した。同年4月6日に立川飛行場を「神風」は飛び立ち、日本時間で10日未明にロンドンに到着する。日本初の欧州往復に成功し、世界最速の記録を樹立した。このイベントは新聞の売り上げに大きく貢献する。同社は話題づくりに飛行機を利用するだけでなく、社用機を用いた日本初の空輸便や旅客輸送も展開し、社の主要事業にも飛行機を利用した。(宇野)

## 89. 『會館藝術』第2巻4号～第5巻9号

朝日会館発行

昭和8～11年(1933～1936)

印刷、個人蔵

朝日会館の機関紙『會館藝術』は、同館での公演や展覧会を特集し、昭和6年(1931)から昭和28年(1953)まで刊行された。演劇、映画、音楽、舞踊、邦楽、美術、写真、大衆芸能の解説・評論から、短篇・長篇小説、詩歌など文芸作品、著名人の随想やインタビュー、各国の文化事情紹介が掲載され、昭和初期の新しい文化動向を伝える。

3巻5号(昭和9年(1934)5月1日発行)は、20世紀初頭にドイツで生まれた新舞踊「ドイツ・モデルヌ・タンツ」を代表するクロイツベルク(1902～68)とルス・ペイジ(1900～91)の特集号。表紙の男性がクロイツ

ベルクで、昭和9年の来日公演の写真を口絵に掲載する。ルス・ペイジはアメリカのバレリーナ、振付師で、昭和2年(1928)の天皇即位式典に際して来日後、クロイツベルク舞踏団に加入し、昭和9年の再来日では「三つの狂態」「帝王の踊り」「反逆」を上演した。(宇野)

## 90. 「ジャックティボウ提琴独奏会」

パンフレット

朝日新聞社会事業団主催

昭和11年(1936)

印刷、個人蔵

ジャック・ティボー(1880～1953)は、フランスのヴァイオリニスト。コルトー、カザルスとの三重奏団で活躍し、ロン＝ティボー国際コンクールを創設した。昭和3(1928)年に初来日、昭和11(1936)年に再来日した。本パンフレットは、二度目の来日時の公演のもので、大阪朝日会館ではフランクのバイオリンソナタ、ラロの「スペイン交響曲」などを演奏した。(宇野)

## 91. 「ヤッシャ・ハイフェッツ演奏会」パンフレット

朝日新聞社会事業団主催

昭和6年(1931)

印刷、個人蔵

高度な演奏技術で「ヴァイオリニストの王」と称されたヤッシャ・ハイフェッツ(1901-～87)は、アメリカを拠点に世界各地で演奏旅行を続け、録音も積極的に行った。大正2年(1923)に初来日し、昭和6年(1931)、昭和29年(1954)にも来日する。本パンフレットによると昭和6年の大阪朝日会館では、バッハの「G線上のアリア」、パガニーニの「24のカプリース」などを演奏した。(宇野)

## 92. 「アレクサンダアノクロチルドサカロフ舞踏大公演」パンフレット

朝日新聞社会事業団主催

昭和9年(1934)

印刷、個人蔵

アレクサンドルとクロチルド・サカロフ夫妻は、戦間期に活躍したモダン・バレエダンサーである。昭和6年(1931)と昭和9年(1934)に来日し、日本の近代舞踏に大きな影響を与えた。パンフレットは二度目の来日公演のもので、10月発行の『會館藝術』にも特集が組まれた。表紙に「大風水害義捐金募集」とある水害は同年9月に

大阪に甚大な被害をもたらした室戸台風のことで、義捐金の募集を呼びかけている。(宇野)

### 93. 「藤原義江独唱会」パンフレット

大阪朝日新聞社会事業団主催

昭和7年(1932)

印刷、個人蔵

藤原義江(1898～1976)は、大正・昭和を代表するテノール歌手で、駐日ノルウェー総領事でイギリス人の父と日本人の母との間に生まれた。大正7年(1918)に歌手デビューし、浅草オペラで活躍した。パンフレットは、二度目のイタリア留学から帰国した際の記念公演と考えられる。大阪朝日会館では、「アフリカの女」「カルメン」など様々なオペラの独唱曲でプログラムを構成し、レパートリーの豊かさが窺える。(宇野)

### 94. 「ヨセフ・ローゼンシュトック指揮 新交響楽団第演奏会」パンフレット

日本交響楽団・朝日新聞大阪厚生事業団

昭和18年(1943)

印刷、個人蔵

ヨーゼフ・ローゼンシュトック(1895～1985)は、ポーランドに生まれ、ドイツ、日本、アメリカで活躍した指揮者。ユダヤ系であった彼は、ドイツから逃れるようにして昭和11年(1936)に来日した。新交響楽団(現・NHK交響楽団)の常任指揮者となり、演奏技術の向上に寄与した。朝日会館のコンサートではブラームスの「ピアノ協奏曲第二番」やスメタナの連作交響詩「我が祖国」より「ボヘミアの森と草原から」を演奏した。戦後はアメリカに拠点を移したが、NHK交響楽団の常任指揮者も務め、日本音楽界の発展に貢献した。(宇野)

### 95. 「ワインガルトナー博士夫妻演奏会」

パンフレット

日墾協会・大阪朝日新聞社会事業団主催

昭和12年(1937)

印刷、個人蔵

フェリックス・ワインガルトナー(1863～1942)は、フランツ・リストに師事し、グスタフ・マーラーの後任としてウィーン交響楽団の常任指揮や、ウィーン宮廷歌劇場(現・ウィーン国立歌劇場)の総監督を務めた。弟子のカルメン・テューダーと結婚し、夫妻は昭和12年(1937)に来日して、新交響楽団(現・NHK交響楽団)

を指揮して東京、静岡、名古屋、京都、大阪で演奏会を開催した。夫人も毎回1曲振り、自らはベートーヴェンの交響曲をとりあげるプログラム構成をとった。大阪では「運命」や「英雄」を演奏している。(宇野)

### 96. 「長谷川昇近作展覧会目録」

朝日会館会場

昭和8年(1933)

印刷、個人蔵

長谷川昇(1886～1973)は、東京美術学校で藤田嗣治と同級の洋画家で、在学中に文展入賞し、明治43年(1910)の第4回文展で褒状を受けた。渡欧してパリではヴァン・ドンケンらと交遊する。帰国後は院展で活躍し、大正11年(1922)に梅原龍三郎らと春陽会を創設する。戦後は日展の幹部会員、日本美術院会員として活躍した。(宇野)

### 97. 第7回『國展』図録

朝日新聞社発行

昭和3年(1928)

印刷、個人蔵

国画創作協会(国展)は大正6年(1917)土田麦僊、村上華岳、小野竹喬、榊原紫峰、野長瀬晩花ら日本画家が結成した団体で、後に梅原龍三郎、川島理一郎ら洋画家や、富本憲吉ら工芸家、彫刻家を加えたが、本図録の第7回展で解散した。本展には麦僊《朝顔》(京都国立近代美術館)、紫峰《冬朝》(大阪中之島美術館)が出品されている。(宇野)

### 98. 「第5回 新興美術展覧会出品目録」

新興美術協会主催

昭和11年(1936)

印刷、個人蔵

足立源一郎、藤堂奎三郎、田川勤次など大阪ゆかりの洋画家をはじめ版画家の前田藤四郎、朝日ビルディングの中之島洋画研究所、心齋橋筋にあった赤松洋画研究所の画家たちが出品する。同展は朝日会館の他に三越や松坂屋、阪急百貨店でも開催された。(宇野)

### 99. 「聖徳太子 1330年記念芸術祭」

記念芸術祭委員会

印刷、個人蔵

聖徳太子生誕1330年記念の芸術祭チラシ。洋楽・洋舞では團伊玖磨(1924～2001)や芥川也寸志(1925～

89)、朝比奈隆 (1908 ~ 2001) といった日本を代表する作曲家・指揮者や、藤原義江 (1898 ~ 1976) など著名な歌手の名前が並ぶ。(宇野)

## ◇中之島公園

### —市民生活とモダンライフ

幕末の中之島は、東側が現在の大阪市立東洋陶磁美術館付近までしかなく、付近が備中成羽藩・山崎家の蔵屋敷があったことから「山崎ノ鼻」と呼ばれる景勝地であった。

明治 12 年 (1879) に豊國神社がここに造営され、明治 24 年 (1891) に淀屋橋より東側の中之島が大阪市初の市営公園として整備される。

その後、公園内に大阪ホテル、大阪図書館など洋風建築が建ち、大正 4 年 (1915) の淀川工事に伴う埋立造成で、旧・難波橋から天神橋の上流へと、現在のように公園が拡充していった。

家屋が密集した大阪の市街地にあって、中之島公園は、土佐堀川と堂島川に挟まれて開放的な空間を形成し、近代的な市民生活を満喫できる憩いの場となった。花壇や奏楽堂が設けられ、貸しボートや、テニスコートなどスポーツ施設も整備された。また大阪市中央公会堂も含めて様々な集会の場でもあり、政治的な集会も開催されている。(小松)

#### 100. 《夜の中の島》

(連作版画《新大阪風景》より)

浅野竹二

昭和 8 年 (1933)

紙本、木版多色摺、26.1 × 36.8、個人蔵

月明かりの中の島公園を、天神橋と難波橋の間にあった噴水を中心に東から西を向いて描く。中央公会堂と旧大阪市庁舎の大きな影が浮かび、現在の「ばらぞの橋」を行き来する人々のシルエットに、近代大阪のモダンな都市風景を抒情的に表現している。

浅野竹二 (1900 ~ 1998) は京都市生まれ。京都絵画専門学校 (現京都市立芸術大学) で日本画を学び、卒業後は土田麦僊に師事して国画創作協会で活躍し、創作版画に転じた。日本各地の名所や行事を画題とした版画で知られる。(小松)

#### 101. 《雪の天神橋》

(連作版画《新大阪風景》より)

浅野竹二

昭和 8 年 (1933)

紙本、木版多色摺、26.1 × 36.8、個人蔵

「新大阪風景」の一景で、天神橋の橋脚から土佐堀川が東横堀へと分流する付近を描く。画面右が中之島公園、画面奥の難波橋の向こうに中央公会堂や旧大阪市庁舎がぼんやりと見える。曇った暗い空と積もった白い雪の明るさのコントラストが印象的。正面で一段高くなった家が料亭の「花外楼」。建物は異なるが今も営業が続いている。(小松)

#### 102. 「日米国 水上競技大会」パンフレット

日本水上競技連盟主催

昭和 10 年 (1935)

印刷、個人蔵

昭和 10 年 (1935) 8 月に大阪市立運動場水泳場で開催された国際水泳競技会。パンフレット裏面に、米国選手団が宿泊した新大阪ホテルの広告が載る。(橋爪)

#### 103. 『大阪叢書 北濱中之島界限』

上田長太郎著・大阪趣味研究会発行

昭和 3 年 (1928)

印刷、個人蔵

郷土研究の叢書。「道頓堀界限」「北濱中之島界限」「新町堀江界限」「堂島曾根崎界限」の四冊が刊行され、中之島公園を次のように記す。

「難波橋と天満橋の間は遊歩公園で、緑樹の陰に噴水塔あり、奏楽堂あり、グラウンドがあり、また難波橋の下をくぐると、土佐堀川に沿ふて運動場があり、反対の側は小供の公園で、水遊や砂遊の設備が整ひ、石段を上ると、街路樹の陰に木村長門守忠誠碑や軍馬の銅像があつて、突当りには公会堂が、どつしりと建てられてある」

難波橋の横での棒高跳びの練習と、それを眺める人々を描いた挿絵は、「大阪パック」の編集長をつとめ、風俗画や漫画で活躍した藤原せいけん (1902 ~ 93) が描いて洒脱である。(小松)

#### 104. 「中の島公園」写真葉書

(「大阪名所」シリーズより)

印刷、個人蔵

#### 105. 「大阪中之島 新公園」写真葉書

明治期  
印刷、個人蔵

### 106. 《中の嶋公園景》

林基春画

明治期

紙本、木版墨摺、20.0 × 27.4、個人蔵

### 107. 「グレート大阪」

(『写真集報』大正12年版秋季號より)

大阪朝日新聞社

大正12年(1923)

印刷、個人蔵

朝日新聞社の懸賞募集と同年の写真競技会(フォトコンテスト)の優秀作を約200点集めた写真集。緒言で印刷技術の向上に触れ、欧米に劣らぬ写真集を作ろうという気概が感じられる。見開きは北浜のビルから撮影した中之島。土佐堀川河畔にテニスコートが整備され、左から市庁舎、府立図書館(両翼を建設中)、中央公会堂、大阪ホテル、堂島川の向こうに控訴院が並ぶ。(宇野)

### 108. 「噴水の輝き」

(「早苗」第七卷第八号より)

大阪早苗倶楽部

大正10年(1921)

印刷、個人蔵

大正後半から昭和初期にレンズの絞りを開放し、光が滲んだようなソフトフォーカスの写真(芸術写真)が流行した。大阪早苗倶楽部は西区新町の杉本写真機店を拠点にしたアマチュア写真家サークルで、機関誌「早苗」にも中之島風景が捉えられている。(宇野)

### 109. 《中之島風景》

富田溪仙筆

昭和初期

紙本、墨画、66.2 × 53.0、個人蔵

難波橋に市電と自動車が走り、大阪城の伏見櫓(戦災焼失)が遠く望まれる。橋の横の公園ではバスケットボールをユニフォームで楽しみ、欄干まで高くボールが上がっている。人物の足の向きを描き直すなど習作とも考えられる。富田溪仙(1879～1936)は福岡市博多区生まれ。京都で都路華香に師事し、横山大観に認められ再興日本美術院を中心に活躍した。自由奔放な画風で知られ、南画風の独自の表現を確立する。大正14年(1925)

にも視点は少し異なるが、難波橋、画面奥の天満橋、大駱城など、同じモチーフで賑わう中之島風景を描いている。(小松)

## ◇大阪遊覧

### 一交通機関の整備と飲食店

市民の足として公共交通が大阪では整備され、路面電車は明治36年(1903)に営業を開始し、バスは大正13年(1924)に大阪乗合自動車(青バス)、昭和2年(1927)に大阪市営バス(銀バス)が開業する。昭和8年(1933)には、日本最初の公営地下鉄である大阪市高速鉄道(現・大阪メトロ)が梅田～心斎橋間で開通した。

中之島では“水都”らしい遊覧が行われる。屋形船で牡蛎料理を提供する「牡蛎船」は大阪名物であり、ボート遊びが定番の中之島公園はデートスポットとしても賑わった。昭和11年(1936)就航の観光艇「水都」は、淀屋橋を基点に大阪港までを巡っている。対岸の北浜や堂島あたりも、食堂や料亭、喫茶店が軒を連ねた。(小松)

### 110. 「梅田一大丸 地下鉄開通記念メリーゴーランド」(ペーパークラフト)

大丸百貨店発行

昭和9年(1934)

印刷、50.0 × 73.5、個人蔵

昭和8年(1933)、梅田-心斎橋駅間に地下鉄が開通したが、翌昭和9年(1934)、地下通路で心斎橋駅と大丸百貨店がつながったことを祝して大丸が発行したペーパークラフト。組み立てて芯を通して回すと、御堂筋を自動車や市電が、その地下を地下鉄がぐるぐる回転する。淀屋橋付近、中之島界限では航空標識灯がある朝日ビルディングが描かれている。(橋爪)

### 111. 「大阪バス」路線図

大阪乗合自動車株式会社発行

昭和4年(1929)

印刷、38.0 × 52.5、個人蔵

## ◇観光艇「水都」

昭和 11 年（1936）大阪市は外国人観光客などに「大大阪活動躍進の実況」を伝えるため、観光艇「水都」を就航させた。淀屋橋の棧橋から土佐堀川を上って天神橋を回り、堂島川に入って安治川から大阪港に出て、木津川を經由して淀屋橋に戻るのが、遊覧コースである。様々なパンフレットが制作されたが、昭和 15 年（1940）戦争で運休した。（橋爪）

### 112. 「博覧会と大阪」パンフレット

大阪出品聯合會

（大阪府・大阪市・大阪商工会議所）

昭和 12 年（1937）

印刷、個人蔵

昭和 12 年（1937）の「名古屋汎太平洋平和博覧会」の大阪館パンフレット表紙。表紙に描かれているのは市営バスと連携して運営された当時最新鋭の観光艇「水都」で、淀屋橋を基点として中之島から安治川、木津川などを巡り水上から大阪市内を観光することができた。日中戦争などの影響もあり、昭和 15 年（1940）には運行を休止している。（小松）

### 113. 「滑稽漫画大阪見物」

千葉かずのぶ画

昭和 11 年（1936）頃

印刷、個人蔵

少年「ぼん」と「おっさん」が大阪の名所を巡る様子がコミカルに描かれる絵葉書。「おっさん」は住吉大社の太鼓橋で滑って尻餅をついたり、心齋橋の人混みで「ぼん」を見失ったりとドジな様子が憎めない。全 16 枚のうち 3 枚に中之島が描かれており、川を進むポンポン舟や朝日ビル上空に飛ぶ航空機、観光艇「水都」に乗り込む二人の右側に見えるかき小屋など細かい部分も見所あり。（小松）

### 114. 「大阪名所遊覧自動車名所案内」パンフレット

大阪乗合自動車株式会社

昭和 11 年（1936）

印刷、個人蔵

大正 13 年（1924）創業の大阪乗合自動車株式会社が運営していた通称「青バス」の系統図と名所案内が書か

れたもの。代表的な遊覧スポットとして大阪城、四天王寺などに加え中之島公園や難波橋も挙げられており、「東方遙カニ大阪城天守閣ヲ眺メ四邊ノ風景又趣アリ」と紹介されている。系統図の中の島には公会堂、図書館、豊国神社、市庁、大朝などの文字が見えるが、「大朝」とは「大阪朝日新聞」の略称である。（小松）

### 115. 牡蛎船「かき伊」チラシ

渡辺ばし・かき伊発行

昭和初期

印刷、個人蔵

### 116. すき焼き店「川柳」チラシ

肥後橋南詰・川柳発行

昭和初期

印刷、個人蔵

肥後橋南詰の精肉すき焼きと水だき、くじら料理の「川柳」のチラシは、背後に朝日新聞社と、当時は中之島（現・フェスティバルホールの位置）にあった中央郵便局が描かれる。「ワリタテ自慢」の「かき伊」は、渡辺橋北詰の牡蛎船。観光艇で中之島を観光する千葉かずのぶ「滑稽漫画 大阪見物」の「大阪モダン街」にも登場する。どちらの店も、和食とモダンな都市景観とのとりあわせの妙がセールスポイントである。（小松）

### 117. 「皆様の菜 / 野田屋」

野田屋

印刷、個人蔵

実業家・野田源次郎が経営した高級輸入食品を取り扱った店で、北浜店・天満橋店の他に大阪倶楽部・有恒倶楽部・茨木カントリー倶楽部に出張所があった。洋菓子や和生菓子、漬物、松茸などを扱った他、店舗には食堂や宴会場なども備えていた。野田屋グラフ No.3 には「戦捷の春 皇紀二千五百九十八年」とあるが、これは昭和 13 年（1938 年）のことで、4 月に国家総動員法が交付され本格的に戦時体制となった年にあたる。（小松）

# 3章 ART ISLAND

## 深化する“アートアイランド”

### —新しい文化芸術の発信拠点—

戦後も中之島は文化芸術の重要拠点である。昭和33年(1958)にクラシック音楽の本格的ホールとしてフェスティバルホールが開館し、国際音楽祭「大阪国際フェスティバル」が開始された。

美術では、昭和37年(1962)吉原治良をリーダーとする具体美術協会の展示施設「グタイピナコテカ」が開館し、昭和55年(1980)に大阪府立現代美術センター(2012年閉館)、昭和57年(1982)に大阪市立東洋陶磁美術館の開館、平成16年(2004)万博記念公園から国立国際美術館が移転する。大阪市中心公会堂で森村泰昌プロデュースの「テクノセラピー ～こころとからだの美術浴～」(1998年)、公園全体を会場にした「水都大阪2009」(2009年)も開かれた。

文学作品にも中之島は登場する。昭和21年(1946)の織田作之助「アド・バルーン」をはじめ、山崎豊子の「白い巨塔」、福田紀一「霧に沈む戦艦未来の城」、宮本輝「泥の河」、東秀三「中之島」などの舞台となった。

さらに中之島は教育の場でもあった。明治期には大阪大学医学部や工学部の源流にあたる大阪医学校や大阪高等工業学校があり、昭和6年(1931)に大阪帝国大学が開校している。

そして現代。中之島香雪美術館(2018年開館)や本年の大阪中之島美術館の誕生で、中之島は世界的にもユニークな“美術館島”に変貌しようとしている。大阪大学も2023年開設を目指して中之島センターを改修し、芸術系の拠点「大阪大学中之島芸術センター」(仮称)の計画を進行中である。

## ◇大阪市中央公会堂のコンペティション

大阪市中央公会堂の建築デザインは、指名制のコンペによって決定された。明治45年(1912)4月23日に17名の建築家に競技規定が発送され、わずか6ヶ月後の10月31日が締切であった。結果的に13名の応募があり、第一等に選ばれたのが応募者中、最年少で当時29歳の岡田信一郎(1883～1932)であった。後に岡田は、東京の歌舞伎座(2010年に取壊)などを設計するが、その才能が最初に認められた大掛かりな仕事がこの公会堂である。建築家の選出方法は厳正を期するため建築学会に委嘱され、次の17名が選ばれた。(五十音順)

伊東忠太、大江新太郎、大澤三之助、岡田信一郎、葛西萬司※、片岡安、古宇田實、鈴木禎次※、宗兵蔵、武田五一、田邊淳吉、塚本靖、中條清一郎、長野宇平治、野口孫市※、森山松之助※、矢橋賢吉(※は未提出・撤回などで審査対象外)

審査も公正を期すため、図案は無記名で暗号(例えば、武田は三角を2つ並べたマーク)によって区別され、応募者にも投票権が与えられた。大正元年(1912)11月27日に投票が行われ、第1等に岡田、第2等に長野宇平治(1867～1937)、第3等に矢橋賢吉が選ばれた。競技の全貌は、本展にも展示する『大阪市公会堂 新築設計指名懸賞 競技図案』で知ることができる。なお、正式名称について落成までは「大阪市公会堂」の名が使用され、供用開始後に「大阪市中央公会堂」と改められたようだ。(波瀬山)

### 118.『大阪市公会堂 新築設計指名懸賞競技 応募図案』

財団法人公会堂建築事務所編・出版

大正2年(1913)

印刷、26.0×38.0、大阪市蔵

当時の懸賞競技の全貌を知る重要な一冊。辰野金吾による「指名懸賞競技に就いて」、公会堂建築事務所・常任理事の栗山寛一による「指名懸賞競技の来歴」、そし

て「競技規定」、「審査規定」に続き13名の建築家の図案をモノクロで掲載するが、原図のレイアウトを尊重するのではなく、同一条件で比較できるように編集し直されている。原図は大阪市が所蔵しているが、岡田信一郎の平面図などが現存しておらず、本書でしか確認できない図面もある。(波瀬山)

### 119.「大阪市公会堂設計競技透視図」

武田五一

明治45年/大正元年(1912)

紙本、インク、水彩、金泥、63.4×100.2、大阪市蔵

武田五一(1872～1938)は、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)の図案科教授、大蔵省臨時建築部技師、京都帝国大学(現・京都大学)建築学科教授などを務め、法隆寺金堂壁画や平等院鳳凰堂など古建築の保存事業にも尽力した。本図のすごさは、正確で繊細な描写、線や墨の濃淡の美しさだ。

当時、建築家の中でも群を抜く高度な描画力の持ち主で、辰野金吾も「製図の仕上は全く一種特別である、(中略)奇抜に手腕を顕はして居るのみならず、尚綽々として余裕の存するところは敬服の外はない」と評した。ただ、トイレ数の少なさ、天井の低さに問題があり採用には至らなかった。

暗号の三角マークと同じ金色が、イオニア式(ギリシャ建築様式の一つで柱頭に渦巻状の飾りをつける)の柱頭の部分や尖塔ドームなどに用いられ、モノクロームの画面にアクセントを添えている。また、正面外観はパリ市庁舎を思わせるという指摘がある。(波瀬山)

### 120.「大阪市公会堂新築設計配景図(透視図)」

矢橋賢吉

明治45年/大正元年(1912)

紙本、インク、水彩、62.1×97.2、大阪市蔵

矢橋賢吉(1869～1927)は、内務省・大蔵省の技師をへて、大蔵省営繕管財局の工務部長を務め、国会議事堂の建設に携わった。本図案は、左右に配される塔が印象的なデザインで、第三等に選ばれた。

朝日を浴びて南面に濃い影が落ち、手前の彩色や輪郭線は明確に、奥の塔などは淡く表現して遠近感を出しており、川に浮かぶ船や周辺を歩く人物なども丁寧に描写する。建築図面のレベルを超え、武田図案と同様に絵画として鑑賞するにふさわしい。手前の塔は、スケール感を出すために上の枠線から屋根の三角錐が飛び出し、エントランス横のライオン像は大阪市の市章である漣標を

手に持っている。

辰野金吾は、「製図の精巧と仕上げの見事」さを評価する一方、「左右角塔の如きは、如何にも誇大で、公会堂変じて公塔と化し、所謂主客転倒の嫌がある」と評し、シンボリックな塔が選考の可否を分けたようだ。(波瀬山)

## ◇中之島と大阪大学

中之島は大阪大学発祥の地である。大阪大学の前身校と中之島のかかわりは明治12年(1879)に大阪公立病院が新築移転されたことに始まる。

また工学部の前身校、大阪工業学校も明治29年(1896)に中之島に設立された。大正12年(1922)に東野田に移転し、その後大阪工業大学となった。

大阪府立医科大学は大正6年(1917)に火災により建物の大部分を焼失した。当時の佐多愛彦学長は郊外への移転論をはねのけ、市中に最先端の病院と大学を維持した。堂島川の向いに病院を移設し、かつての病院跡地に大学を再建した。このときに予科を待兼山に移したことが豊中キャンパスへとつながっていく。

第二代大阪医科大学学長となった楠本長三郎は帝国大学設立運動を推進し、昭和6年(1931)に大阪帝国大学が誕生した。理学部を医学部の南側に新設し、昭和8年(1933)には大阪工業大学も工学部となり三学部体制となった。

戦後、中之島は手狭になってきて、第二室戸台風での浸水を契機に昭和41年(1966)に理学部は豊中キャンパスへ、昭和40年代から吹田キャンパスの建設が始まると、中之島からの移転が進み平成5年(1993)には医学部と病院の吹田への移転が完了した。

かつての医学部の一角に平成16年(2004)に建設された中之島センターがその記憶を留めている。(宮久保)

### 122. 《中の島医学校》(大阪医学校)

鈴木蓄斎

明治12年(1879)頃

絹本、墨画、169.5 × 41.5、大阪大学医学部医学史料展示室蔵

明治2年(1869)年に上本町大福寺の大坂仮病院に始まる医学校の系譜は学制改革により廃止の危機にあった。そこで府下の有志の寄付と文科省からの借入金により大阪府病院が設立された。病院内には教授局が設置され、オランダ人医師のエルメレンスなどが教鞭をふるった。明治12年(1879)には中之島の常安町に移転して大阪公立病院と改称し、翌年の明治13年(1880)に教授局が病院から分離独立して府立大阪医学校となった。明治21年(1888)には校名を大阪医学校と改称し、病院が学校附属となった。その後数回の改称ののちに、大阪帝国大学医学部となった。このように、大阪医学校は現在の大阪大学医学部のはじまりである。

本図を書いた鈴木雷齋(年基とも、生没年不詳)は、月岡芳年の門人で、明治10年代に活躍した大阪の浮世絵師。西郷隆盛の肖像を錦絵で描くほか、油絵も手がけたという。本図は数少ない雷齋の肉筆画の一つである。(辻野)

### パネル展示：エルメレンス記念碑

明治14年(1881)

大阪大学医学部前設置

エルメレンス氏はオランダの貴族出身でベルリン大学を首席で卒業し明治4年(1871)我が国の招請に応じて28歳の若さで来日、大阪医学校にて教鞭をとった。医学全体の様々な新知識を授け、明治10年(1877)6月任期満了で帰国後、フランス旅行中に38歳の若さで死去したと伝えられている。

大阪大学医学部の今日を成した深い恩人であるエルメレンス氏の記念碑は明治14年(1881)に中之島公園(中央公会堂東南方)に建てられ、以来ほとんど忘れられていたのを大阪の医師有志の手で昭和11年(1936)大阪帝国大学医学部正面玄関右手に移された。現在は吹田市にある大阪大学医学部の前に設置されている。

この記念碑は我が国の医師が外国人教師のために建てた最初のものである。(辻野)

### 123. 『写真集 大阪大学の五十年』

大阪大学五十年史編実行委員会小委員会編

昭和56年(1981)

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

大阪大学の前身校と中之島の関わりは、明治12年(1879)に旧広島藩蔵屋敷跡の常安町に、大阪公立病院を新築したことに始まる。以後、変更を重ねながら、平成

4年(1992)に医学部と病院が吹田キャンパスに移るまで大阪の医療・医学教育の中心であり続けた。

工学部の前身校である大阪工業学校は、明治29年(1896)に旧高松藩蔵屋敷跡の玉江町に文部省直轄の官立学校として設立された。しかし拡張を進めるには手狭となり大正11年(1922)に東野田に移転し、昭和4年(1929)に大阪工業大学となった。

創立25周年記念行事として2000人収容の講堂が計画され、大阪大学後援会により募金が進められて昭和35年(1960)に竣工した。翌年に松下幸之助の寄付により大学本部として建設された松下会館と棟続きで一体運用されて、松下講堂と呼ばれた。(宮久保)

#### 124. 『大阪大学医学伝習百年史年表』

大阪大学医学伝習百年記念会

昭和45年(1970)

印刷、個人蔵

明治2年(1869)に上本町大福寺に仮病院が設立されてから100周年の記念事業としてまとめられた。大正6(1917)年の記述には、病院の焼失と、その後に移転論が府議会で否決されたことが記載されている。(宮久保)

#### 125. 『大阪大学五十年史 部局史』

大阪大学五十年史編集実行委員会編

昭和58年(1983)

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

昭和55年(1980)の中之島地区の空撮写真では、写真下方に、右(南)側の土佐堀川から、左(北)の堂島川を挟んだ向かい側まで中之島キャンパスが広がっている。旧微生物病研究所の建物はすでになく、理学部の移転はすでに済んでいたが、建物がまだ残っている。

大正期の地図では、堂島川の向かい岸に大正13年(1922)に新築された病院がみえる。中之島側の病院は火災後の仮病院で、その跡に大阪医科大学(後の医学部)が大正14年(1924)に再建された。この地図の医科大学の場所には後に理学部が建設される。大正11年(1922)に東野田に移転した大阪高等工業学校の校舎も残っている。(宮久保)

#### 126. 『大阪大学五十年史 通史』

大阪大学五十年史編集実行委員会編

昭和60年(1985)

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

昭和36年(1961)の中之島地区には医学部と附属病院、

理学部、歯学部と附属病院、微生物病研究所と附属病院、蛋白質研究所があり、医学、生命科学の一大拠点となっていた。講堂(松下講堂)では入学式や卒業式など全学行事が行われた。(宮久保)

#### 127. 『きりひと讃歌』

手塚治虫作・手塚治虫書店

(手塚プロダクション/丸善ジュンク堂)

令和2年(2020)からオンデマンド出版

印刷、個人蔵

昭和45年(1970)からビッグコミックに連載されたこの作品では、謎の奇病「モンモウ病」に立ち向かう青年医師、小山内桐人の数奇な運命を描く。作中の舞台の一つ、川沿いにそびえたつM大学医学部病院のモデルは手塚ゆかりの大阪大学といわれている。(宮久保)

#### 128. 『紙の砦』

手塚治虫作・手塚治虫書店

(手塚プロダクション/丸善ジュンク堂)

令和2年(2020)からオンデマンド出版

印刷、個人蔵

手塚治虫は医学専門部で学ぶ傍ら、漫画家としても活動していた。自伝的作品を集めた短編集に所収の「がちゃぼい一代記」(初出 別冊少年マガジン 昭和45年2月号)では橋のたもとで着替えて出版社に向かうようすが描かれている。(宮久保)

#### 129. 『ブラック・ジャックは遠かった: 阪大医学生ふらふら青春記』

久坂部羊著・140B

平成25年(2013)

印刷、個人蔵

現在も続くフリーペーパー「月刊島民」に2009年から2012年にかけて連載された「中之島ふらふら青春記」をまとめたもの。久坂部羊は中之島時代の大阪大学医学部の卒業生で、医療に関する小説や書籍を多数執筆している。(宮久保)

### ◇大阪大学中之島センター大改修

平成16年(2004)に現在の「大阪大学中之島センター」が大阪大学創立70周年を記念して設

立された。この中之島は昭和6年(1931)に大阪帝国大学が創設されたいわば発祥の地である。「大阪大学中之島センター」は、この地に20年の間、大阪大学の社会学連携活動の拠点として大きな役割を担ってきた。この度、大阪大学創設90周年を機に、全面的に改修をして、大阪大学の学術、技術、文化、芸術など新しい時代に向けた発信拠点としての一層の深化を目指している。

改修では、1階2階部分を共用スペースとして、大阪大学の歴史資料や研究資料に触れながら、人々が集い、ひとときの憩いの時間が持てるように構想されている。3階4階部分には、大阪大学のアートを軸にした教育や社会連携のためのスタジオや展示スペースが設置される。5階部分は社会学共創のスペースとしての活用が期待されている。また8階と9階には会議室やラウンジ、また最上階の10階の佐治敬三ホールもこの度全面的な改修を行い、より大きく、また使い勝手のよいホールとして生まれ変わる。

この改修後の「大阪大学中之島芸術センター」(仮称)は2023年春のオープンを目指している。改修後には、ここ中之島で、大阪大学の豊中、吹田、箕面の各キャンパスで育んできた知を今一度ダイナミックに交差し、学術、技術、文化、芸術の発信拠点となって、社会との結びつきを一層活発にして行こうと考えている。(永田)

## ◇グタイピナコテカ 1962-1970

グタイピナコテカ(大阪市北区宗是町33、現在の大阪市北区中之島3丁目)は、具体美術協会(具体)のリーダー・吉原治良が所有する江戸時代末期の土蔵三棟を改装した施設で、具体の活動拠点として昭和37年(1962)9月1日に開館した。「ピナコテカ」とは、吉原によれば「古代ギリシャの絵画館を意味する言葉を原典とする英語」であり、懇意にしていたフランスの美術批評家ミシェル・タピエの提案に基づく。

グタイピナコテカは開館当初から、具体以外にも視野を広げ、国内外の作家たちとのネットワー

ク形成の基盤になることを目指していた。具体会員たちの個展やグループ展を定期的で開催すると同時に、主にタピエが支持する海外作家たちの展覧会を積極的に企画し、新人の発見を目的とした新人展も実施した。こうして1960年代半ばには「来日する世界の美術関係者、あるいは前衛芸術家たちの必ず訪れる名所的存在」となったが、残念ながら都市計画により立退きを余儀なくされ、昭和45年(1970)4月20日に閉館した。(加藤)

### 130. 《作品》

堀尾昭子

昭和42年(1967)頃

水性塗料、紙、接着剤、材木、19.8×30.0×5.8、大阪大学総合学術博物館蔵

本作は、グタイピナコテカで開かれた具体美術小品展(1967.12.1-20)出品作の可能性のある一点であり、裏面には昭和43年(1968)7月の結婚以前の姓名「木村昭子」の署名が見られる。箱の中にいわれる木工用ボンド(酢酸ビニル樹脂系エマルジョン形接着剤)で厚紙を接着し、水性塗料を何度も厚塗りして仕上げるスタイルは、具体美術新人展(1967.3.1-10)で初めて発表され、吉原治良に高く評価された。以後昭和43年(1968)にわたって箱の作品が集中的に制作されたが、現存する作品は数点しかなく、その意味で本作は貴重である。(加藤)

### 131. 《作品》

堀尾昭子

昭和46年(1971)

水性塗料、合成皮革、14.5×33.5×7.0、大阪大学総合学術博物館蔵

### 132. 《作品》

堀尾昭子

昭和46年(1971)

水性塗料、合成皮革、24.3×25.3×9.0、大阪大学総合学術博物館蔵

これら2点はいずれも、具体グループとして最後の展覧となった具体美術小品展(グタイミニピナコテカ、1971.12.6-18)出品作である。グタイミニピナコテカは、グタイピナコテカが昭和45年(1970)4月に都市計画で立退くことになり、代わって翌年10月に、近くの大

ビル西別館1階(大阪市北区宗是町1)に開設された展示スペースである。昭和44年(1969)頃から素材として採用した合成皮革は、住まいから近かった神戸・長田の路上で拾ったものである。ケミカルシューズ生産で知られた長田では、当時路上のあちこちに合成皮革が落ちており、それを夫の堀尾貞治が集めてきたという。(加藤)

### 133. グタイピナコテカ友の会案内

昭和40年(1965)頃

印刷、個人蔵

### 134. グタイピナコテカ地図

昭和41年(1966)頃

印刷、個人蔵

### 135. 具体美術新人展(1967.3)ポスター

昭和42年(1967)3月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 136. 具体美術新作展[第18回具体美術展](1967.6)案内はがき

昭和42年(1967)6月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 137. 第19回具体美術展(1967.11)案内はがき

昭和42年(1967)11月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 138. 具体美術小品展(1967.12)案内はがき

昭和42年(1967)12月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 139. 具体美術新人展(1968.2)案内はがき

昭和43年(1968)2月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 140. 第20回具体美術展(1968.7)案内はがき

昭和43年(1968)7月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 141. 第21回具体美術展(1968.11)案内はがき

昭和43年(1968)11月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 142. 具体美術小品展(1968.12)案内はがき

昭和43年(1968)12月

印刷、大阪大学総合学術博物館蔵

### 143. 具体美術小品展(1969.12)案内はがき

昭和44年(1969)12月

印刷、個人蔵

### 144. 上前智祐による日記

上前智祐

昭和37年(1962)8月1日～9月30日

紙本、インク、大阪大学総合学術博物館寄託

1962年8月25日に、グタイピナコテカ(当時はグタイピナコセカ)のオープニングパーティが開かれ、「多くお客さんがあった」と記されている。また、「グタイピナコセカ友の会」入会案内と、上前が当日付けていた、具体会員を示す「G」のマーク入り名札が日記に貼付されている。(加藤)

### 145. 上前智祐による日記

上前智祐

昭和37年(1962)10月1日～11月30日

紙本、インク、大阪大学総合学術博物館寄託

1962年11月21日に、グタイピナコテカでの常設展示平面図が手書きで記されている。グタイピナコテカには開館当時は4つの展示室(A～D)があり、このうち原則としてA、Bが常設展に、C、Dが会員個展等に使用された。具体会員の外に、ジョルジュ・マチウヤサム・フランシス、フランコ・アッセットといった、吉原が1957年以後、フランスの批評家ミシェル・タピエを介して交流した作家たちの作品も展示されていた。(加藤)

## ◇中之島と文学

### 146. 「土佐堀川」(「番傘」第二十一巻五号表紙)

国枝金三画・番傘川柳社

昭和7年(1932)

印刷、個人蔵

番傘川柳社は、大正2年(1913)に大阪で西田當百、

岸本水府らが設立し、現在も全国的に活動している。本号の表紙は、中之島洋画研究所の講師であった洋画家・国枝金三（1886～1943）が軽妙なタッチで土佐堀川を描き、朝日新聞社から西を見たものと思われ、中央遠くは江之子島の旧大阪府庁のドームだろう。（橋爪）

#### 147. 「大大阪君の似顔の図」（『第13回一平全集』第9巻より）

岡本一平著・先進社  
昭和4年（1929）  
印刷、個人蔵

朝日新聞社の依頼で“大大阪”の肖像を描きに来阪した岡本一平（1886～1948）は、大江橋よりモーターボートで市内の水路を巡り、中之島では落日に「難波橋ビルディング、野村ビルディングが古塔のやう」とするイラストを載せる。（橋爪）

#### 148. 「アド・バルーン」（『世相』より）

織田作之助著・八雲書店  
昭和22年（1947）再版  
印刷、個人蔵

作品集『世相』に収録された「アド・バルーン」（「新文学」昭和21年3月初出）の舞台に中之島が登場する。（橋爪）

「公園の中へはいり、川の岸に腰を下して煙草を吸いました。川の向う正面はちょうど北浜三丁目と二丁目の中ほどのあたりの、中華料理屋の裏側に当たっていて、明けはなした地下室の料理場がほとんど川の水とすれすれでした。その料理場では鈍い電灯の光を浴びた裸かの料理人が影絵のようにうごめいていました。（中略）

提灯をつけたボートが生物のように川の上を往ったり来たりしています。浪花橋〔注・難波橋のこと〕の上を電車が通ると、その灯が川に落ちて、波の上にさかさになった電車の形を描きだします。やがて、どれだけ時間がたったでしょうか、中華料理屋の客席の灯が消え、歯医者さんの二階の灯が消え、電車が途絶え、ボートの影も見えなくなってしまっても、私はそこを動きませんでした。」（織田作之助「アド・バルーン」より）

#### 149. 『白い巨塔』・『続 白い巨塔』

山崎豊子著・新潮社  
昭和40年（1965）・昭和44年（1969）  
印刷、個人蔵

天才外科医・財前五郎を主人公に、架空の国立浪速大

学医学部を舞台に医師のモラルを問う山崎豊子（1924～2013）の「白い巨塔」は、昭和38年から昭和40年（1963～65）に「サンデー毎日」に連載され、昭和42年（1967）から翌年の「続 白い巨塔」で完結した。現在は正統をあわせて「白い巨塔」全34章の形で刊行される。小説の中で浪速大学医学部は、土佐堀川を隔てて、大阪市庁舎と対面した現在の北区西天満に設定されている。

映画では、昭和41年（1966）に山本薩夫監督、田宮二郎主演で「白い巨塔」（大映）が公開され、テレビドラマでは田宮（1978年）のほか、村上弘明（1990年）、唐沢寿明（2003年）、岡田准一（2019年）が財前を演じている。（橋爪）

#### 150. 『将棋水滸伝』

藤沢桓夫著・文藝春秋  
平成3年（1991）  
印刷、個人蔵

坂田三吉、升田幸三、大山康晴など大阪の棋士をとりあげた藤沢桓夫（1904～1989）の小説。表紙は都心の川筋と遠く天守閣を格調高く描くが、中之島とおぼしき風景はイメージの大阪というべきかもしれない。（橋爪）

#### 51. 『霧に沈む戦艦未来の城』

福田紀一・河出書房新社  
昭和50年（1975）  
印刷、個人蔵

大阪が日本から独立宣言したことでおきるドタバタを描いたSF小説。中之島全体が大きな戦艦に改造され、東京にむけて出撃するが、そのまま消息をたつところで終わる。福田紀一（1930～2015）は、京都大学文学部以来、小松左京と親交が深く、同人誌『VIKING』に参加している。（橋爪）

#### 152. 『中之島』

東秀三著・編集工房ノア  
平成3年（1991）  
印刷、個人蔵

天神橋筋から老松町、曾根崎新地、中之島を題材にした連作小説集。最後の「中之島三丁目」では、昭和天皇崩御の報道にたずさわる記者を描く。（橋爪）

#### 153. 『鍵の掛かった男』

有栖川有栖著・幻冬社  
平成27年（2015）

印刷、個人蔵

中之島の小さな「銀星ホテル」を舞台に犯罪学者・火村英生と、著者自身の有栖川有栖が難事件を解決する推理小説。文庫本も刊行され、この「火村英生シリーズ」は、『怪しい店』と『鍵の掛かった男』が対象期間内の文庫新刊として、2018年、第3回吉川英治文庫賞を受賞している。(橋爪)

## ◇もう一つの公会堂プロジェクト —もしも他のコンペ案が実現していたら

大阪市中央公会堂を素材としたプロジェクトや作品制作がこれまでもなされている。

昭和55年(1980)、心齋橋のソニービルで「中之島第三の道展」が開かれ、上田篤、東孝光、安藤忠雄、渡辺豊和らを中心に大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、大阪市役所、日銀大阪支店を用いた「設計シミュレーション」が公開された。

平成10年(1998)には、保存・再生工事に入る直前の大阪市中央公会堂を舞台に、森村泰昌プロデュースによるアートプロジェクト「テクノテラピー」が開催される。森村はまた、チャップリンの映画「独裁者」を題材にした作品を、中央公会堂の特別室で制作している。

本展覧会では、13名の建築家が参加した公会堂の設計競技で入選しなかった案が、もしも実現していたら、現代の風景はどうなったかを武田五一、矢橋賢吉、伊東忠太、大江新太郎、中條精一郎のコンペ図案を使って、合成画像で提示する。中島界限のみならず大阪の街の印象も別のものになったのではなかろうか。(橋爪)

### 121. 大阪市中央公会堂 可視化プロジェクト モニター展示

橋爪節也立案・波瀬山祥子制作

令和4年(2022)原画：大阪市蔵

### 154. 『建築からの仕掛け リ・インカネーション

展 1980-1985』

東孝光・安藤忠雄・上田篤・渡辺豊和編・学芸出版社

昭和61年(1986)

印刷、個人蔵

「保存か、開発か」が問われる建物の「第三の道」を模索し、“生まれ変わり”を意味する「リ・インカネーション展」(全5回、1980～85年)が開催された。建て替えても、その「進化形」を意識することで時代のニーズに応え、親しまれてきた形やイメージの継承も可能とする。大阪大学の上田篤を中心に建築家が各自担当した図面と模型が展示された。

「中之島第三の道」と題された第1回展(会場:心齋橋、ソニービル)では、大阪市中央公会堂を上田篤・加藤晃規、大阪府立図書館を渡辺豊和、大阪市役所を安藤忠雄、日本銀行大阪支店を東孝光が担当する。(橋爪)

### 155. 《なにものかへのレクイエム(独裁者はどこにいる)》図版(「森村泰昌:なにものかへのレクイエム-戦場の頂点の芸術」より)

東京都写真美術館、豊田市美術館、広島市現代美術館、兵庫県立美術館発行

平成22年(2010)

印刷、個人蔵

### 156. 「ユリイカ 特集=森村泰昌」

青土社

平成22年(2010)3月号

印刷、個人蔵

### 157. 「Photographica vol.18 特集:森村泰昌」

MdN コーポレーション

平成22年(2010)

印刷、個人蔵

大阪を拠点に国際的に活躍する森村泰昌(1951～)は、大阪市中央公会堂と関係が深く、平成10年(1998)保存修復に入る直前の公会堂を会場に「テクノテラピー～ところとからだの美術浴～」をプロデュースしたり、チャップリンの映画「独裁者」の場面を公会堂の特別室で演じた《なにものかへのレクイエム(独裁者はどこにいる)》(2007年)を制作する。この作品は、「ユリイカ」や「Photographica」の森村特集の表紙も飾った。(橋爪)

## 謝辞

本展覧会開催にあたり、下記の皆様をはじめここにご芳名を記せなかった多くの方々のご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。(五十音順、敬称略)

大阪くらしの今昔館	木多道宏
大阪市経済戦略局文化課	黒田毅
大阪市中央公会堂	坂上和典
大阪大学医学部医学史料展示室	佐々木洋三
大阪大学大学院工学研究科	高市純行
大阪大学大学院人文学研究科	津村長利
大阪歴史博物館	西川昌
株式会社カワチ	長谷川隆一
株式会社竹中工務店	服部麻衣
株式会社ロイヤルホテル	福島正晴
関西経済同友会	福田知弘
BAR 瀧	船越幹央
	細川亜子
阿部文和	堀尾昭子
磯野正智	牧孝一
上田裕司	増井正哉
上前祐二	丸山晃生
大西毅	森隆太
岡田志津	森満代
岡本英之	

大阪大学総合学術博物館第16回特別展

**「モダン中之島コレクション**

**“大大阪”時代の文化芸術発信センター」**

公開日 2022年6月17日

編集 波瀬山祥子（大阪大学総合学術博物館）

※無断での転載、転用を禁じます